南上原（中城村）

宮城　聰

時　一九六九年十月十六日
場所　宇南上原　富島区長宅

氏名	現住所
富島喜松	[redacted]
仲座方亀	
富島トヨ	
普天間ツル	
喜屋武ヤス	

解説

中城村、字南上原は、舗装された縦断道路を歩いていると、沖縄にこんな大陸の大平原みたいな、東・西両方の海の見えない広びろとしている平野があったのかと、意外の感じに打たれる。南北は四キロメートルに足らなくてもそれに近いだろうし、東西も三キロメートルよりも広いだろう。

座談会連絡の手ちがいで、最初の日は、開催ができなくて、同行の名嘉史料編集所長と、南上原のほぼ中央部、やや東よりと思われる縦断舗装道路を歩いて見ることにした。人家は、おうかた孤立して、沿道にも、三、四百メートルぐらい離れて、一軒、多くて二、三軒かたまっているぐらいで、部落という感じはない。

集り場所に決めてあった富島区長宅も、孤立して前面は見渡す限りの甘蔗畑だが、そこを出て、四百メートルばかり歩いて、はじめてブロック建ての人家が右がわにあった。わたくしたちは、その家に居合した二人の婦人と話した。二人とも戦争の時は、南部へ下って、九死に一生を得たが、家族は、大部分は犠牲になったと話した。二キロメートルぐらい歩いたところに、今度は道の左側（東がわに）、落成したばかりのブロック建築があった。そこへ入り込んで、在宅の主人、津嘉山朝善さんに、訊いた。津嘉山さんは熊本にいたが、本家も全滅、自分の家も父母始め全滅、本家の位牌も、自宅の位牌も、この家で祟めている。自分の男の子たちが、成人したら、各おの位牌を分けて持たす、と話された。

津嘉山家から東南方の丘に塔が見える。訊いたら、糸蒲（いとかま）の塔と教えてくれた。自分が帰った頃も白骨が畑や野原に、無数にあったので、南上原字の南地区の人たちが、集骨して糸蒲の丘に塔をつくって祭った、といい、その数は何千で、正確に数えられてはいないと語った。

糸蒲はその丘一帯の名称だそうだが、わたくしたちは、塔の丘へ行った。南方援護会が最近建立したもので、白一色の高さ数丈の立派な塔だった。

また四、五百メートル行くと、二人の男、共に五十歳前後の人たちが道ばたに休んでいた。沖縄戦についてきいたら、共に防衛隊に出て、家族の半ばよりも多く犠牲になっていた。

この座談会出席の普天間さんと喜屋武さんは区長さんを通じてのわれわれの出席依頼を再三断わられたのを、無理にお願いしてのご出席であった由。肉親が、艦砲や爆弾や栄養失調などで、惨酷な犠牲になる場面は、声がつまって、それと共に悲しみの極限に陥入り、涙を押さえて話される場面が多かった。喜屋武さんは六十七歳になっていられるが、事がらはたしかな記憶と受け取れた。独特の話し方であるが、それが、却って当時をよく再現している、注意深くよめば、消略や沖縄的いい方が却って実情を現わし、ユニークの表現だと思う。

それから、話しの抑揚や沖縄方言の「あいえーなー」「あきさみよー」などの感動詞は、標準語へよく表わせないのが残念である。「ね」という語尾も絶えず出るが、これは、実際に聞いていると、感じがよく出てわかる。普天間さんや、富島さんの場合も同じだし、北中城村大城の中村のぶさんのお話しも共通で、小説と異り、記録としては、語感を捕えることは消略して、読者の推察にまかすほかはない。

それから富島区長さんは、最後になって、現役時代のことを話され、帰郷されてからの話ははし折られてテープに入っていなかった。

それで追加再録し、テープを翻訳したが、眼目と思われる事柄が語られてないところから、名嘉編集所長と共に出かけ、不明のところ、ことがらをお訊ねして明確にすることが出来た。

そこでわたしが富島区長さんの話を読む方に、一言ここで前もって述べて置き度いことは、兵隊から復員した富島さんと、沖縄の戦争からひとり生き残っているお母さんと、はじめてあう場面、これは、世紀の天才でも、思い及ばない特異な人間ドラマと思われることである。

普天間　ツル（三十一歳）　主婦

お彼岸はうちでやったような気がしますが、敵が上陸してからか、それとも三月の末でしたか、はっきり憶えておりません。

うちの後の丘に、石部隊の陣地がありまして、兵隊さんがうちにいましたが、兵隊さんから、こっちは危くなっていますから、避難した方がいいですよ、と言われましたので、家族皆いっしょに出かけることにしました。

家族は、わたくしたち夫婦、舅、姑、第二番姑さん、主人の弟の嫁、それにわたしたちの子供が五人、長女が十二歳、長男が九歳、次女六歳、次男四歳、末の女の子が誕生になっていました。

家を出かける前に、兵隊さんが来て、こんな沢山の子供ですから、食糧は持たれるだけ持ちなさいと言われたので、わたくしはできるだけ玄米を沢山持つことにしました。家族は十二人でしたが、主人の弟、次男は海軍の兵隊に行っていましたので、十一人の家族が自分の墓に行っておりました。玄米を一升瓶に入れて、竹の棒で精（しら）げてごはんをつくったり、芋を畑に行って取って来て煮て食べていましたが、兵隊さんが廻って来て、危険の時はいいますからと話したから、もうあの墓場で十日ぐらいいまして、その間皆無事であった。このときに、戦車が二台ねえ、墓場の前は馬場になっているが、あっちの方に敵の戦車が二台入って来ましたのでね、墓場の

上は友軍の砲陣地だったのです。その下に墓場があって、そっちにわたくしたちは住んでいたんです。そうして墓場の前に戦車が二台入って来て、はじめは向こううって、またつぎは泉川（屋号）の家を焼いて、今度はわたしらの方へ向けて、もしも二発撃ったら、もうこっちで最後だったが、一発撃ったから無事に生き残って、墓の袖から弾が通ったので誰も怪我しないですんだんです。その時は、はじめは、うちのお父さん（夫のこと）は、あッ友軍の戦車が来たといって、手を拍いた。お父さん、敵ですよ、敵であるよとわたしがいってもきかんです。そうしてあちこちばんばん撃ったから、この時にあッ敵であるといって内に入って来てた。それから晩になる間は、少しじっとしていて、それから、あのお、たそがれ時になってから、その場合は、タカネウチ（地名）に一列並びしてアメリカーがたくさん来ていましたよ。もうそれは大変だと思って、それから荷物を担いで逃げたから、鉄砲をバンバンバン撃たれてね、昼まだ夕暮れ時、まだ明るかったんです。それからまた木の下に立って、静かになるまではこっちで待っていて、もう静かになったから歩き出しましたが、まだ夕暮れ時だから飛行機は、ぶんぶんぶんと飛んで通るしね、飛行機に見られたら大変だ、と思いつつ逃げたんです。アメリカの兵隊さんを見たから恐くて、兵隊はよく見えたので銃でバンバンされたんです。だが一発も当らなかったが、頭の上にのせてあった荷物はばらばらだったんです。首里の方で下して見たから、お釜から、布呂敷包みから、全部ばらばらだったんです。

それから桃原農園のところを通って福地山に行きました。あっちは、運天の一門のお墓がありますので、またあっちでしばらくは暮してね。

そうしていると福地山は、迫撃砲や艦砲がバンバン、黒い煙になって、あっちもこっちも、何が何やらわからない。艦砲が今自分の上に落るのかと思ったり、はげしくて、ここにはいられないといって、首里へまた行って、首里にもはげしくていられないので、那覇へ下りて行きました。わたくしたち家族は十一人だが、親戚が皆いっしょになって、十九名でありましたから長い列になって、まるで葬式のようでした。那覇は焼けてはいましたが、松尾（市内）にいい壕があるからあっちに行こうといって、松尾に行って、壕に入っていました。そこにしばらくいましたが、壕のそばに艦砲が落ちて、壕の中にいたお母さんとわたくしの子供二人と三人が、横からくずれ落ちた土に埋められましたので、あわてて掘り出しました。人は見えているが土の大きな塊りで圧されて動けなかったのでした。それから、兵隊が、うちの人を防衛隊に出そうとしましたので、壕の一番奥の方に坐らして、わたしたちのうしろにして見えないように隠れさせておきました。艦砲も落ちるし、主人も兵隊に取られては大変だと思ってそこから逃げて、裏の墓に行きました。そこには二日ぐらいいましたかな。そうして南へくだろうといって南の方へ逃げました。何んというところを通るのかわかりません。足の向くままに、わたくしたちは山の方を通るようにしました。艦砲は絶えず落ちて、それはすごいんです。その中を通るのですが、十九人の長い列だのに、一人も当りませんでした。歩く時は、真先きはお父さん（舅）、しんがりがわたしの主人で、中の人たちが一人でもいなくなると大変だからといって歩きました。艦砲は、四発ずつづいて撃ちますが、四発が終ると、ちょっとの間は間があります。その時に歩くのです。艦砲は人が歩くところに落ちるのです。足の向くまま通ってから、そうしてから島尻に。どこだったかね、運玉森が反対に見えるところに行きました。あっちは運玉森といっていましたが、あっちは首里、あっちは那覇といっていました。一日橋来るまでは昼でありましたが島尻に入ってからは夜になりました。夜は艦砲は止んで照明弾が上るしね、明るいうちに急でね、といって歩いた。また暗くなったら、ゆっくりゆっくり歩いて、わたしらはそんなにして歩きました。わたくしは、誕生になる子を背中に負ぶって、食物は持たれるだけ頭の上にのせて、それから沢山の子供だから、着る物を雑嚢に入るだけ入れて、それをわき腹にくくりつけて、さきへさきへと歩きました。数え年の四歳になる次男はおばあさんが手を取って、みんな背嚢をはかしてね、九歳になる子は背嚢と毛布を丸めたのを肩からかけさせてね。

もう頭も馬鹿になって、どこをどう歩いたか、来たこともないところを足にまかして歩いたのです。それから御飯は少しずつ、また芋掘られる時は芋を掘って、芋が掘られない時にはこの米を食べて。それから戦前は芋葛ですよね、タビオカもあるし、芋葛も沢山あるし、こういうものを、大きなヨナバーキー（ざるのこと）に入れて、またほかの何にかも入れて、わたくしは皆の食糧係りでした、大勢の人の。それでも最初の中は苦労とも思いませんでしたがね、全部元気ですから。弾は激しくても、子供等も、ほかの誰も、一発も当らないので、こんな運のいいことはないんですから、ところがそれから後が大変でした。

そこが弾が激しくなって、逃げることになりましたが、弾は、あっち行っても、こっち行っても、激しく落ちて、弾に追われるように、また弾の中をくぐり抜けるように、あちこち逃げ廻った。それでも皆が元気の間は、よかったですが、何といったかな、大きな製糖工場のあるところ、昼歩いていたが、道は避難民がいっぱい歩いていた。その場合に、四発だったかね、親戚ではなかったが、知っている同じ部落の人が一家全滅して、わたしたちの家族では、主人の弟の妻、これひとりはやられたのでないかなと見ていたら、これがやられていました。艦砲の破片が、背中のちょうど真中のところに入って。道ばたのキビ畑に連れて行って、消毒するのを持っていましたから消毒して、死にそうになっていたが、わたしの主人は、荷物を全部捨てて、弟の妻を負ぶって行くことにしました。わたしは荷物もかついで、子供も負ぶってね、そんなにして歩きましたが、わたくしの主人は体が小さいのに、弟の妻は大女で、負ぶっていると、足が地面についたりぶらんぶらんしてですね、前の部落は何といったですかね、あッ、与座仲座といいました。それでわたしは、弟の妻が、死にそうになっているので、元気を出してよ、前の部落に行くまでは、といってですね。それで、部落の馬小屋に行ってですね、すぐ死にましたので、毛布で包んで、蛸壺壕ね、あれに埋めて、それが旧の六月十日であった、それとも新の六月十日ですかね、もう終りになっていたが。

それから大渡、米須といったですかね。あっちで人の家で一夜を明しました。海が見えるところでした。海からね、艦砲でしようね、バンバン撃って来てね、おばあさんと、長男と、また長女と、

次男坊、これだけこっちで怪我しました。おばあさんは頭で、ちょっとは生きていました。おばあさんは、（こみ上げる悲しみの情を抑えようとする気持が見え、しばらく声を止める）自分の夫、おじいさんね、二番ばあさんも呼んで二人にね、わたしは死んではいないよ、魂は生きて見ているのだから、あんたたちは、この孫たちを立派にそだててやりなさいよ、と言い終ってから亡くなりました。長男は、心臓をやられて、水くださいかあちゃんと（泣きながら）これだけです。（仲座方亀さん、口をはさむ、級長だったんですと）長男とおばあちゃんはね、畑の中で埋めてね、葬ってね、（当時を想い出して、悲しみが全身に飽和して堪らない様子で、自然に目頭に湧き出る涙と、鼻孔を伝わる鼻水をハンケチでおさえながらも、話をつづけようと努めていたのであったが、声は独りごとのように、何か二こと三ことというのは、はっきりわからなかったそれから後も、鼻をかんだりしながら涙声なので、はっきりとは、ききとれなかった）また帰って来るからね、いくさが終ったら、生き残っていたら、また帰って来るからね。こんなに沢山荷物持って、あなたたちを生かすためにこっちまで来たのに、あなたたちが死んでは、もうわたしは駄目ですといってね。あなたたち貰いなさいといってね、そうしたら皆が奪い合って取ってしまって、そうしてその時は、その二番姑さんはいましたよ。わたくしに怒って、あんたは食糧何も持たないでこの生きている子供たちには何くれるか、といってね。それでもわたくしはもう何も持てないから、あなたたち貰いなさいといってね。これまでそんなに沢山荷物持って来たがね。その時からわたしはキビで杖をついてね、あっちの方にいって、大渡米須からどこであるかもうわからない。わたくしの主人は、荷物を全部捨てて、次男坊と長女と、もっこと芋を入れるザルに入れて棒で、担いで来たんです。

この時はね、財産家の金持、石垣で囲いされてね、馬小屋から母家にかけて、大変大きな家だから、こっちの家はもう沢山皆、いっぱい入っているから、わたしたちはね、前の石垣の方にね、擬装してね、こっちの方にいたんです。こっちの方で、もう何というか、破傷風というかね、長女が、かあちゃん、口が動かないよ、というんですね。そこにきてから二、三日ぐらいは生きていたんですよ、あの子は。足の股に弾が入っていたんです。十二歳の長女がなくなって、またこれも、次男坊もなくなって。

家に入られないので前の石垣に入っていたこの場合にね、もうわたしは、中には防衛隊も入っているし、子供はお父さんがこんなにしてね、わたしは穴の口の小さいところに、誕生の子を抱っこしていると、機銃でね、目の前からヒュールと音たててね、何んだったかね、と思ったら、もう中の防衛隊が一ことも言わずに死にました。

それから、家から、馬小屋から、一ぱい入っている人がね、家を焼かれて、それからもう逃げる人は逃げるし、またここで焼け死ぬ人もいるし、わたくしたちの叔父さん夫婦もここで焼けて死にました。焼夷弾といったかね。わたくしは、前の方で子供を負ぶって、その場合、家は焼けて、馬小屋に移っているからね。もうぶらんぶらん倒れそうであったから、わたしは、ここで焼けて死ぬものかといって、また子供をかかえて、前の垣根をくぐって逃げてね。

その時は、もうあっちこっちに、頭も飛ばされてね。足があっちに飛んでいるし、艦砲であったか、首なんか木にぶら下っているのもあってね、爆弾は大きな穴があくでしょう。

註、　避難民や防衛隊員などが密集している家屋に焼夷弾の集中攻撃を浴びせると同時に、空と海との組織的連繋が神わざのように、間髪を入れぬ瞬隙の間もない、ほとんど時を同じくして、あまりに目的に対して正確な、集中艦砲の破裂によって、怪我人や老幼婦女子には火を逃れることができないで焼け死ぬ者も大勢あるし、火から逃げ出たものは、艦砲射撃で、一人の脱出者もないように、みな殺しにすることが随所で行なわれた。米軍の戦術であったろうと推察される。この場合、話し方は、こまごまと取り上げてはいないが、情況は想像できる。

部落の人で、刑務所の看手でしたがね、看手部長で、ピストルを持っていてね、この人はいつも、最後にはわたくしがやるから覚悟しておれよ、といつも話していたがね、妻子たちに。ここで妻が破片に当って死んだんだからね、長男は、もう大きかったから十四、五になっていたが、これを殺して、女の子にも一発うったんですが、この子は、足に弾が当って死ななかったから、弾は一発しかなかったので、わたしは自分で死ぬからといって、ここから行ってしまいました。どこに行って、どうなったか、そのまま、わからなくなってね。女の子の足はね、疵は軽かったのでね、わたくしたちといっしょに行った。

これから静かになったから、こっちの前には大きい家があったんで、またこの大きい家に入ってね、この家に入ったら、防衛隊がいっぱい入っていて、避難民から、床の下までみんないっぱいでした。わたしたちも入っていたが、弾が激しいから、わたしは、うしろの、このうしろの小さい壕は、ちょっと石垣をくずしてね、あれで小さい穴をつくって、これにわたしらはいました。この場合にこの大きな家は、また焼かれてしまったんです、ばらばらに。

焼かれない前に、迫撃砲といったかね、あれでバラバラやったから、こんな沢山の人全部やられて、わたしの主人と二男坊、だっこして、また二番姑と三名、ほかの避難民と四名しか残っていませんでしたよ。皆肩をくっつけ合って、いっぱい入っていましたよ。ただ一人しか残っていませんでした。わたしは、こっちは激しいから行こうね、といってわたしが、いったばかりですよ。何が落ちたか、わかりませんがね。おじいさんは破片で首、こっちをこんなにして切られていました、坐ったまままあ死んでね。うちの人は毛布を被ったまま、この毛布は大変きたないんですよ。人間の肉がもう散らばって、それをこのまま被って、うちの小さい壕に走って来てね、もう全部やられたよ、わたしらばかり残っているよ、おじいさんも皆なくなったよといって、わたくしの壕に入って来て、その場合にその家をまた焼いてしまったんです。

そのうちに子供が一人は生きていてね、逃げられないで、もう母の、死んでいる母のおっぱいにすがってね、いはあ、いはあ、と泣いて、それも助けに誰も行かないで、そのまま焼け死んだ。そしてわたしらは、このきたない毛布を被ってこの小さい壕にうずくまって、子供等といっしょに、皆体を縮めて入っていたが、あんまりあついからといって、うちの人は毛布をはねのけて、壕から出たら

ね、もう燃えていた家は、ゆらりゆらりしてね、自分の壕の上に落ちて来るんです。その時わたしも、せまい壕の中にひっつき合っていると、汗がにじみ出てね、あんまりあついから壕の口に立ち上って見るとね、主人が、どうした、焼けるから早く出ろ、出ろよといったから、わたしと子供と先に、この次からまた（屋号）のあれを出して、また最後に、いとこになるかね、女の子、あれは背が高いから焼けてね、わたしの主人はこれを引っ張って出すために、もう顔いっぱい焼けどした。

こっちからまあ、あのおー最期と思っていましたが、このときに、那覇にいっしょにいたおばさん、今津波（字名）にいるあのおばさんが、あれももうこっち、お臀全部無くなっている、破片で取られてね、それで死にそうだったんです。このおばさんは、わたくしたちの子供を自分の子のように可愛がっていたんですがね。あなたたち、こっちは危いから、子供二人は生き残っているからね、あの皆が行くところに行って頂戴いねとわたしに頼むんです。わたしはもう駄目だから、ここで死ぬ、この二人の子供はぜひ生き抜かしてよー、といってね、皆が行くところに行きなさい、といったんです。そうしてこの方とここで別れてね。

そうそう、次男坊は、おじいさんといっしょに破片で怪我して、その時に死んだんです。それで、主人は、次女を抱いて来てね、もうわたくしたち二人だけになったといってね、入って来たんです。それで自棄糞になってね、もうどっちでもいいといって頑張っていたが、このおばさんがね、あなたはね、女、男といわないで、この二人の子供を安全なところに連れて行って生かしてよー、といわれて、女の子だけ二人をつれて、こっちから、この二人を抱えてまた、前の山の中に入ってね、この山で休んで行こうね、といって。その時は、六歳の次女と誕生の女の子、わたくしたち夫婦と四人ですね、それに、いとこの娘、看手部長（父）に射ちそこなわれた九歳の女の子、それから、第二番姑もいっしょでした。

山の中で休んで、それから行こうとしていたらね、この場面でまたこの山焼かれて。山へ行くのを見られて。

そこから逃げてですね、知らないところだから、どこをどう歩いたですかね、たそがれ時になっていました。喜屋武岬といったかね、あの阿檀垣の中に入りました。その時に、この人（同席の仲座さん）にあいました。それから、皆、生れ故郷に行こうねといって、夜、突破する時に、二番姑は、はなればなれになって、わからなくなりました。

わたくしは、膝頭が大きくはれてですね、歩くこともできませんで杖をついて歩いておりました。その時に、もう水もないし、水だけは飲まして、死なしてよーと主人に願ったらね、何んというか、お釜を持って、あるだけの道具を持ってね、これを持って海岸へ行ったら、もうこっちは、アメリカーが、来ていた。敵はこっちにいるといって、水も汲めないよ、まあ、いいよといって、また帰って、もうどこへ帰っていいか、あっちの方、あっちに敵がいるからこっちの方へ、また海岸を通って、こっちの方へ、少しずつ歩いたら、まあ小雨がチラチラ降りだした。神様もいたなといって、天に口を向けて、そうしてこの雨をなめて、こうしていたら、まあ、大きな雨がざあざあ降って、そうして阿檀垣に入って、助ける神もい

られたといって、まあ腹一ぱい飲んでね、あまり水が流れるもんだから、この晩は、わたしは仰向けになって、誕生の子を腹の上にのっけて、寝てね。

その前の日ね、子供等は三日の間、何も食べていないし、水も一滴ものんでいないので、兵隊がにぎり飯をくれたが全然食べないでね、カンパンくれても食べないしね、水も飲みませんでした。三日間、まったく食べてないし、水も飲んでいないので、体が弱っていたんです。誕生の赤ん坊は、乳が出ないからおっぱいばかりしゃぶってね、これもこんなに痩せてね。

そうしてまあ翌日、その時にね、船からは放送するしね、避難民は出て来い、おにぎりをやるから出て来い、出てこいといってね、後の方から阿檀垣は焼くからね、あなたたちは出て来なさいと放送したからね、わたしはこの子をおんぶして、手で這うて、上にあがって。わたしが一番先に出ました。

わたしは、上にあがる前、主人にね、あなたたちは、思い通りにここで死になさいね、わたしは、海岸にあがって、（断崖の中腹あたりに阿檀林があって、その中に壕があったか、それとも海岸から断崖まで阿檀のある場所に壕があって、海岸というのは、阿檀のない、海岸からつづく断崖の上をいっているように思う。南部海岸にはこのような海岸につづく崖と、海へ乗り出している巌頭が多い）あがったらアメリカーは、手をこんなにこんなにして、出て来い、出てこいしたから、あッ殺さんよーといって、わたくしをこんなにこんなにして、手をのばしてね、そうしたから、もう皆、出てこい、みんな出て来い、殺しはしないから、早く出て来いといった。そうしたら、まあこの時は、皆、穴の中から全部出てね。そうしてこっちから捕虜とられてね、また、座安・伊良波へつれて行かれた。その時は、海岸は、潮が干上っていたが、アメリカさんが、上からも、下からも、足もつかまえて、海岸に下して、また海岸は潮が干上って船がないから、わたしは杖をついて、どこかの防衛隊（員）にこんなにしてかかえられてね、まあこの持っている水も全部飲んでしまったから、皆が水を飲んでいるのを見たら欲しくってね、少し残り水があったら、わたしにも飲ましてねと言ったら、もう飲ましてくれる人は誰もいないんです。その時に防衛隊（員）がひとり、水筒を肩からかけて、いっしょに歩いていましたよ。その防衛隊（員）にアメリカの兵隊さんが、手真似で、これあげてよ、といったが、この防衛隊（員）は、飲ましてくれないんですよ。それでアメリカの兵隊さんが、これから奪い取ってね、わたしに飲ましてね、それから、クーサンデ（人名だがよく聞き取れない）という防衛隊が、ずっと抱えて、伊良波へ来て、あっちで一夜を明かしたんです。

明日になると、あのお、五十以下か五十以上だったか、男と女はもう、別べつにね、主人は分かされてしまったんです。生き残った、ただこれだけ、生きているのも分かされて、もう生きていても駄目だ、と思ってね。

トラックに乗せられて、わたしは一番先きに行ったから、久志村へつれられて、後の方は野嵩へ下りる人もいるし、また、主人は、いつもわたしらを見つめているからね、あの一番の車であったからといって、つぎの車に乗っていたんです。わたしらが下りると、主

人も下りたんです。あっていっしょになったと思って、わたしおしっこして来ようね、といって、安心しておしっこする間に、また連れられてしまって、もう見えなくなって、主人は屋嘉につれられて行って、その間はべつべつに暮しました。その間は一週間だったかね。その後からまた主人は、久志村に下りたから、たしかに、こっちに妻たちがいると思って、あちこちさがして、クチャ小、コチャグワ、いいえ、久志ぐわでした。そこでいっしょになりました。

主人は、あの時顔が真黒になって、ずっと黒くて、とれなかったが、捕虜とられた時も弱っていましたので、誕生の子を負ぶることができなくて、この方が（同席の仲座さん）ずっと負ぶって、謝苅までつれて来て貰いました。

それから体が弱っていましたから、戦後になくなって、いまはいません。

あのいとこの子供は生きていますが、あの時の疵は残っています。

また、看守部長だった方の、射ちはぐらかされて、足を疵していた子は元気で、今も生きています。誕生だった赤ん坊は、死にそうであったんですが、大きくなって、今は数え年で、二十六歳になっています。

海軍に行っていた、主人の弟、具志頭村で最初に、弾に当って死んだあれの夫ですが、その次男も、どこで戦死したのか、わかりません。

わたくしたちは十二人の家族でありましたが、戦争が終って捕虜とられた時までは主人もいて四人生き残っていましたが、主人もまもなく死んで、わずか三、四か月の間に、小さい子供二人とわたくしと三人だけになりました。

註、　久志村での捕虜生活は、普天間さんの場合も人間の極限の試練、ずいぶん多勢の人命犠牲があったほどだから、多くの苦難を経ていられるだろうが、それは他に多くの人が語っているので割愛することにした。

富　島　ト　ヨ（二十二歳）　未婚家事

四月三日に、うちは家族四人で逃げました。お父さんとお母さん、それに兄さんと四人でありました。二男の兄さんもおりましたが、ひとりで逃げていませんでした。兄さんは三十ぐらいになっていましたが、病気で防衛隊に取られませんで、わたくしたちと一しょに歩くのもやっとでありました。

家を出ると下におりまして、西原（村）翁長に行きましてですね、豆腐坂という坂を通って、おなじ西原村の桃原に行きました。夜になったから桃原に一晩泊りました。大きな壕で兵隊さんの壕でありました。荷物は、ほんの着替一枚ずつでですね、食糧も少しずつ両手に下げて持ちました。

翌朝は首里の本家のおじさんたちのところへ行こうといってですね、うす暗い中にたって首里のおじさん方のところに行きました。首里は赤田の東で、「クンバル仲座」といったり、「お墓の前」「馬の背中」といいました。そこに十日ぐらいいました。食事は隣りの畑からですね、大根なんか、キャベツなんか、またお芋なんか

貰って来て食べていました。その時は、畑にまだ大根なんかありました。壕はですね、お墓が沢山ありましたので、大勢の人がお墓に入っていました。それから兵隊さんがいらっしゃってですねえ、こっちは危いから船越の方へ行きなさいといったからですね、本家のおじさんたちも、隣りにいた人たちも、皆いっしょに、野原から下りて行きました。南風原の学校のうしろで一夜をあかしてですね、またこっちから、もっとあっちへ下ろうと言ってですね、宜次・外間という部落、あっちへ行きました。宜次・外間の大きな屋敷のうしろに山がありました。壕は屋敷の内に本家のおじさん方といっしょに掘りました。本家のおじさんは、お箸をつくっていましたが、その時に爆弾が落ちてですね、おじさんの右の手の手首から先きの方がですね、切れてしまいました。おじさんは、破傷風になってですね、一週間ぐらいで亡くなりました。ここには二十日ぐらいいましたが、それまでは、食事はあまり困りませんでした。本家のおじさんたちは、おばさんと子供と三人でしたが、わたくしたちは、本家のおばさんや子供と別れました。宜次・外間を出て、近くの山の斜めになった丘に壕を掘って、お父さんとお母さんと兄さんと四人でいました。そこはですね、雨が降って壕に水がいっぱいになって、弾はここは落ちませんが、いられないといってですね、武富（豊見城村）という部落に行きました。そこで防衛隊のおじさんといっしょに歩いていますとですね、そこに憲兵隊がありまして、おじさんが軍服をつけていましたから、何んで防衛隊が民間の人といっしょに歩くかといってですね、おじさんは止められました。おじさんと別れて、武富の部落には、一晩だけ泊りました。そんなに弾は落ちませんでした。

それから高良（東風平村）という部落に行きました。その時から、壕もないんですから、おうちにおりました。瓦葺の家で、残っていました。上の座敷に兵隊さんがいました。このうちの家族も沢山いました。負傷している兵隊さんが水下さいといっていました。高良には一週間ぐらいいました。食べるものはですね、昼は弾が激しくて、朝、晩に、畑に行って芋をとりました。

それからですね、ここにもいられないといって、夜になってから新垣に行きました。新垣は人の家の近くに行きますと人が沢山いるといいました。弾が激しくて、あっちでも、こっちでも、人がうんうんうなっていました。艦砲も爆弾も大へんはげしくて、大きい音がしました。ここは、いられないといって、夜が明けてから逃げました。沢山の人が死にましたが、わたくしたちは、四人、誰も怪我もしませんでした。

それからですね、海の近く、大渡（摩文仁村）に行きました。こっちには一晩も泊りません。またこっちから、後戻りして真栄平（真壁村）に行きました。部落の近くの野原にいましたがですね、そこもはげしくていられませんでした。ここで、同じ部落の人がいっしょになっていましたが、小さい子供と大人も二、三人弾に当って亡くなりました。

それから朝になってから、真栄平の後の松林の中に行きました。そこには、同じ部落の人たちが、隣りに、三家族いました。どこの人たちか、知らない家族が五、六人いました。壕といっても、石を

持って来て置いたんです。そこも弾が激しくていられませんでした。一夜明けたらですね、五、六人いた隣りの家族が全部やられて、全滅でありました。同じ部落の隣りの人たちも五、六人死にました。桃原ぐわ（屋号）の家族、東下小（屋号）の姉さん親子、それから「みーやーうーぐわ」（屋号）の中学生、まだ二年になったばかりであったと思います、中村栄勲といいました。そっちの奥さんは、その子を亡くしたので、それからは大変悲しみました。それからですね、みんな、はげしくていられないから、山を下って、少しでも・自分たちの部落に近くなるから行こうね、といってそこからいっしょに、山を下りました。亡くなった人は、そのままおいて、埋めることはしませんでした。下りて行きますと照明弾が上って歩くことができませんで、暗くなったらまたちょっと歩いたら、照明弾が上るから、一夜をそこで明かそうね、といって、山に泊りました。

それから、兄さんとお父さんも、非常に疲れていますから、眠ってしまいました。そうしましたら、親戚の人たちが、わたくしたちのところから行きましたので、お父さんを起して、親戚の人たちが、今、ここから行きましたよといったら、お父さんは、それでは、わたくしも、親戚を追うて行かないと道がわからんから、親戚をおうて行こうね、お前たちはそこにいなさい、といわれて、わたしたちを放ったらかして親戚の後をおうて行かれました。お父さんは、親戚の人たちが、キビ（甘蔗）を取りに行くので、自分も行かねばならないといって、甘蔗取りに行ってキビ畑の中で弾に当って亡くなりました。あとで親戚の人たちから聞きました。

それから、このままここにいたら大変だから行こうね、といって、わたくしが兄さんを負ぶって、坂道をのぼりましたが、なんともころんでいくことができませんでですね、兄さんをもとのところまで連れて来ましてですね、兄さんを寝かして、またあしたは来るから寝ていなさいね、といって、お母さんと二人で歩きました。どこをどう歩いているかわかりませんでしたが、人が歩いているのでついて行きました。弾が落ちなくなっていましたのでですね、前へ前へ行くことだけ考えて、兄さんを連れに後に戻ることは、アメリカーが恐くて考えませんでした その日の四時頃ですね、海の見えるところに行きました。わたくしとお母さんのいるところの上、崖の上に次男の兄さんとねえさん（義姉）がいることがわかりましてですね、いっしょになりました。海岸の近くでした。

それから、その翌日に海岸の近くで捕虜取られました。食事は、新垣に行く前、高良でも、一日に一回ぐらい、畑からほじくって来た芋を食べました。小さい鍋だけは持っていましてね、火は、いっしょにいる人から貰っていました。新垣から大渡、大渡からまた戻って真栄平、真栄平の山、それから兄さんと別れるまで、朝晩の弾の落ちない時に、キビ（甘蔗）をさがして取って食べました。一週間ばかりの間ですね、ほとんど食べなかったんです。

捕虜取られる時は、殺されるのかな、アメリカーの前に行くと、どんなにされるかなあと思って、顔も上げることができませんでした。百名（知念村）に収容されまして、それから志喜屋（知念村）へつれて行かれましてですね、そこで南上原の人たちにあいまして、あなたたちも生きていたかといわれました。それから山里（同

村）へ移されました。山里にずっと後までおりまして、そこでお父さんが、キビ畑で直撃を受けて即死されたとききました。

山里に来てからはですね、畑に行って芋を取って食べることができました。

兄さんはですね、南上原の家に帰ってから、次男の兄さんといっしょに、遺骨を取りに行きました。別れた時に寝ていたように、そのまま骨になっておりました。

家族は、次男兄さんのお嫁さんと六人でありましたが、四人は生き残ることができました。結婚して、ほかの家に行っていた姉さんは、島尻で、弾に当って死んだんです。お父さん、兄さん、姉さん、お母さん、次男の兄さん、わたくし、親子六人の中、半分ずつわけて、三人は死んで、三人は、弾に当らないで、生きています。

喜屋武　ヤス（四十三歳）　主婦

家族は長男が兵隊、十月入隊の石部隊、数え年で二十一歳、上の長女が数え二十三歳、これは、許婚（いいなずけ）と文通して、台湾に行くつもりでしたがね、いいなずけが海軍に七か年間いましたからね、大丈夫といって、あそこへ呼び寄せることになっていましたよ。でもいくことができないで、家にいました。次女が、ひめゆりの一高女の四年生、卒業していました、三月二十八日に。

註、当時の一高女教諭、仲宗根政善著、『沖縄の悲劇』には、二十九日になっている。また、沖縄タイムス社編著、『鉄の暴風』にも「南風原に来てから六日目の三月二十九日、午後十時から、型ばかりの卒業式が、しかし厳粛な気持ちで挙行された。一高女及び女子師範生の卒業予定は三月二十五日であったが、情勢が急に悪化し、直ちに従軍学徒看護婦として、召集されたので」となっている。

次男坊が満十七歳、学校卒業してうちにいました。海軍志願させてくれといって、先生方がいらっしていましたがね、もう長男が兵隊当っているから、ひとりしか旅に出されないと思っていましたから、お断りしていましたがね、今になって後悔しています。十一歳が、今三十五歳になっている子、また数え七歳が三女、数え五つの子が四女、五女は赤ん坊、四十三歳の子でしたわたしの。八十一歳のおばあさん、わたしの姑、お父さん（夫）が四十二歳、防衛隊でした。

次女が女学校から来て、皆、九州の方に疎開した方がいいよといっていましたがね。お父さんも、お兄さんも兵隊だし、兵隊より先きにわたしたちが疎開したらどうするか、お前一人で行っておりなさい、学校からやるならといってやりましたがね。学校は家族といっしょにしか受け付けないから、お母さんが行かないなら、もう行かない方がいいといっていました。そうしてちょうど三月二十五日までの間に、二回来ていましたけどね、二十八日の朝卒業式、その日をもって出たらもうひめゆりの。

この子は体はまあ丈夫でですね、水泳（みずおよ）ぎもよくやるし、六年生の体操の時に、校長先生のそばの風呂場に立ってですね、ひとりで健康体操なんか、くらくなってもあの子はしていました。その後もうわたしは、今でも学校に行き得ないほど、その子が見えるよう

ですよ。六年の時に、模範児童としてですよ、六か年皆出席して、高等一年から女学校に入って。

それから、うちには兵隊さんが、座敷にも、また馬小屋の二階にも沢山いますから、いつも情報をきいていました。で、もう、壕に入った方がいいよ、艦砲が激しくて、もうこっちなんかにいられませんよといって、兵隊からも早く出なさい、出なさいと言われましたからね、兵隊が掘った壕に十四、五日、はいりました。また敵が上陸して、中城城趾に来ているから、こっちは駄目ですから南の方へ行きなさいといわれた。それから翁長（西原村）の今の中学校のあるところの後（うしろ）の、あの丘の方に、兵隊が掘ってある壕に入ってですね。そこで十四、五日か、十六日ぐらいおりましたが、あまり、壕の前の砂糖キビの畑がですね、燃えたもんですから、この壕にもいられんから、どこかに行こうといった。うちは親の家は首里ですからね、テラコ（現在の首里中学のすぐ下）の方に親をたずねて行きましたよ。翁長から、首里へ行く途中は、艦砲が激しくてですよ、夕方でしたからね、あそこ行ったら、虎頭山の東の方に大きな巌があるが、その下に首里の人がいっぱいでした。わたくしたちの家族が八名、上の兄さんの家族が四名、十名余り行きましたから、そんな大勢は入らない、どうにかやりなさい、といいました。こっちで、わたくしの弟の妻がですね、おむすびやるから、すみません、どこかに行ってねといったから、また、砂糖キビは焼けて、煙も消えているだろうから、あっちへ行こうねといって、途中で一晩明かして、暗やみで、また翁長へ帰りました。隣りの壕には、兵隊さんがいっぱい来ていましたよ。で、まあ、翁長に戻って来てね、そこでまた四、五日いて。油も持っているし、米も持っているし、芋葛なんか、何かは、炊かれる時にはまあ、兵隊さんが、あっちのかまどで炊いたがいいよといいましたから、上の長女がいますから兵隊さんを追うて行って、芋葛炊いたり、飯炊いたりして皆に食わしていました。それでこっちに四、五日いたら、あっちの壕も、こっちの壕もやられて、今度は、敵はもう津覇小学校に来ているから、前に進まんと大変ですからといって、また兵隊さん、大西中尉といって、中尉さんがこっちから出たり入ったりしていましたよ。その方が、どこかに行く方がいいよといいました。それでは行こうといって、夕方に出ましたら、ちょうど池田（西原村）の兵隊さんが掘ってある壕へ行くまでに、三べんか四回、墓に隠れたり、溝に隠れたりして、池田の壕に行ったんです。それからもう激しくなって、艦砲打ち込まれて、皆出られなくなるよ、とまた兵隊さんがいいましたので、東風平の方に、郵便局に勤めている女の方、いとこがいるので、東風平まで行ったらどうかねといって、そのいとこをたよりにして、東風平の方に行ったら、具志頭村後原（東風平隣接）といって、こっちにわたくしたちが掘ってある穴があるから、あなた方はこっちででも、避難して置きなさいねといって、壕もさがして下さったですよ。それからまたあっちの家で、上のおじさまを見たり、はなしたりして、その時までは、何のことも無かったですがね。それからまあこの具志頭壕行ったら、東風平の後のタカグ毛といってありますね、そこに敵がこんなに立ってですね、クワラクワラクワラ、クワラクワラ、クワラクワラして、また夕方になっても、その音が絶えません。また米兵の顔も見えましたよ。そして

またいとこが来て、こっちにもっといたら大変だから、少し前の方へ進んだ方がいいよといった。いとこがそういうので行って見ようかねといったが、でもこっちからでたら女ばかりだもの、どうして前に進むことができるか、こっちで死んでもいいからと思って、前に行け行けといわれても、東風平の後原の小さい壕に皆いたですね。それから、グマーグワ（屋号）というところの人が、よくいらっしゃいました、野菜も取って食べなさいねといいますので、ありがとうね、といって、毛布で被せてですよ、その小さい壕で、芋を煮て、子供たちに炊いてくれる間に、その時に具志頭村の青年団長といって、兵隊二人、一人は上等兵一人は兵長を連れて、うちの息子をつれに来ていました。その息子は、年は十七歳であるけれどもね、兄さんより大きな、大変いい体格で、その兵隊とちょうど同じぐらいでした。それで、この子を連れて行くといって、引っ張って行こうとするので、わたしは、明日になれば、どこかに行かれるだろうと思って、明日にして下さいと願ったけれどもね、この兵隊たちが、弾運搬したり、担ぐのもあるからといって、青年団長と兵隊が連れて行きました。その時からはわたくしたち、薪をさがして来るのもおらん、この長女ひとりで、わたしは赤ん坊抱いているし、また八十一歳のおばあさんもいるし、四歳の子は泣いて、まあ、どうなるのかねえ、と思っているうちに、タカグ毛に、アメリカの兵隊の沢山の顔が見えていましたからね、どこかへ行かねばならないでしようといって、みんなを連れ出してこの壕から出た。

新垣の方へ行く道では、艦砲が激しく、この長女の膝に破片が入ってですね、塩をつけて、またこれを布呂敷で強くくびって、この四歳の子もわたしが負ぶったんです。その時からは、もう着替えも持たないで、米一升ぐらいと、芋四個持って、次男坊がいた時までは、担いでいましたがね、新垣に行く時には、もう次男坊がいないから、何も持つことはできません。またこの次男坊は、連れられて行く時には、兵隊から食糧の米なんか二合ぐらいは貰って来ますから、お母さん心配しないでね、といって行きました。このフンドシとじゅばんも洗ってねーといって出たっきり、来ませんですよ。

そうして十二日ぐらいしたら、いっしょに行ったおじさんが、手に怪我して、もう鉄砲も打てない、負傷者も背負うことができないしといって帰って来ました。それで、うちの次男坊はどうなりましたかときいたら、行く時は爆弾を負って持って行って、帰りにはまたあっちで戦死した兵隊（負傷兵のことでないかと思う）を負ぶって、年が若いから無理ですけれど、十日ぐらいはいっしょでしたが、そのあとはわたしはわかりません。わたしは後原の病院につれて来られて、それから妻子をたずねて行こうとして、こんなに帰って来たよといった。このおじさんから、子供のことをこれだけきいてですね、生きて別れて。おかあさん、わたしの片身と思って食べて下さいよといって、芋を二つに割って、一つはわたしの膝の上に置いて、一つは持って出て行った。義勇兵といっていましたよ。昼は休みまして、夜しか使かわないからといっていたから、今日は帰るか、あすは帰るかと待ったんです。男の子は一人、この十一歳になるの。男の子はみんな兵隊、もうどうなるんだろうと大変……。

その時長女が、おかあさん、新垣にみんな行くから、わたしたちだけこっちに残ってはいけないから、いっしょに行こうとこれがい

いおったから、そうかといって歩き出しましたが、あの川がありますね。（場所不明）あっち行ったらまあ、艦砲が落ちて、ああ、どうぞわたしたちの上に落ちて下さいといって、わたしが駈け出したら、この女の子がね、おかあさん、また落ちるよ同じところに、といって川の岸に、伏せしてね、この子は、そうしてわたしを引きよせて、四つなる子も坐らして。それで二度落ちてですね、もう二度落ちたからまた少しずつ歩いた。ちょうど今時分（夜八時）、飛行機は帰るしね、今頃だしね（座談会している時）新垣まではどうしても行きつかなければといったら、いっしょに歩いていたおじいさんが、新垣というところは、芋もないしあんたがたこんな大勢子供をつれて、ひもじくしに行くのかねといわれた。川岸に休んでいる間にそう言われましたけれどね、おじいさんありがとう、まあ、みんながあっちへ越えるんだから、皆がいう通り、生き残りは女ばかりですからといって、新垣の方に行ったら、大変大きな家がありました。行ったらまあ、西原の人から何にから、まあいっぱいしていたですよ。母家の床の前に、ほんのちょっとしかわたくしたちの入るところはなかったんです。床の前のわきだけで、女の子、男の子も、おばあさんも、この家に入っていました。

そうしたら、アシャゲ（離れ）に艦砲が三べん落ちて、まあ、あっちにいた人はみんな死んだ。公民館の前の大きな家ですよ。アシャゲには沢山の人が入っていました。そのアシャゲのいっぱい、人がみんな死んで。わたくしの女学校に入っている女の子の小さい時の先生ですね、与那原の、あのお、安谷屋先生といって女の先生が、ご姉妹二人がですね、いつかはあっていっしょになりましょうねといって、アシャゲにおいで、おいでという間に、もうわたしたちは、こっちに寝るねといって、坐っていますから出ませんでしたよ。そうしたら、雨垂れ（雨垂落ちのこと）のこっちにまた四度目が落ちて、縁側にいた人たちは皆破片でやられてですね、人も家も血がべとべとしていたんです。またわしたちもこんな長い破片がこの子供の上からあっちに落ちて、畳の上は焼けていましたけれど、子供の上からですがね、わたしたちの。怪我はなかったんです。

それからまたまあ夜明け方、飛行機が来るまでに、どうしても壕に入らなければならんといって、それなら土手の、あの新垣の前の井戸がありますがね、その井戸を前にして、そのうしろの上は、つきでている岩であるが、そこは泥土であるので掘りやすいから、また部落の人に道具も借りてですね、この二尺ぐらい掘ってですね、その掘っている時は、小さい子たちも土運びをしてですよ、そうして一尋ぐらい掘って、こっちの内におばあさんを入れて、その壕にみんな入って、穴の口を擬装していました。

その時は、六月の一日頃でした。そうして、六月の十七日に捕虜になったかね。その捕虜になる前、新垣のこの井戸の上の畑の上に、機関銃を構えて、アメリカ兵隊はこっちへ、パラパラパラ、パラパラパラ撃っているから、内においてある道具も、全部散らばらして、うちのカバンなんかすべてなくなってしまって、そうして壕の口は、蘇鉄の葉などで擬装してありましたが、小さい破片は入って、五つになる子の股に破片で少し怪我して、また男の子の頭に、破片が一つは入って、グリグリ手にさわりましたがね。ちょうど焼けどみたようにして、いたい、いたい、いいましたから、どうなるか

ね、もうこっちで死ぬ方がいいね、とアメリカの兵隊に囲まれて、アメリカ兵の顔を見てから、機関銃でパラパラされてから。

夜になってから、この男の子と姉は、こんなに兵隊に囲まれているが、喜屋武の家がなくなってはいけないから、わたくしはこの男の子を助けないとならん、お母さんたちは、こっちに残ってね。わたしたちは故郷へ帰るからと長女がいいましたから、死ぬならいっしょに死ぬ方がいいよと、いくら止めても止められないで、喜屋武の家がなくなると、大変だから、この男の子、弟を連れて出ますから、もうあなた方は、おばあさんとともに、フジ子が手榴弾を置いてあるからね、そうなった以上、もうこの手榴弾で、おかあさんたちは死ね、といってこの二人が出て行きました。この壕から出てですよ、こんなにこんなにして（出て行く時の様子を示す）、敵の照明弾の下から、また、海からは迫撃砲も来ますがね。土手に隠れたり、溝に隠れたりしてですよ、そうして這って、故郷の中城へといってわたしと別れたけどね。ちょうど隣部落の真栄平、その部落まで歩いて、そこの部落に行ったら、小さい祠（ほこら）があったそうですが、この祠に行く時には、雨がざあざあ降りましたから祠に入ってこれたちは雨をためたものを飲んで、水はわたくしたちより先きにのんでいました。

上の娘が言ったフジ子（ひめゆり部隊）が持って来た手榴弾というのはですね、女学校を卒業して従軍看護婦になっていた次女が、わたくしたちが新垣の壕に入って三、四日ばかり経っていた日の夜ですね、ひょっこりわたしたちの壕へ来ました。どこといいましたかね、真栄平でですかね、同じ部落の人たちから、あなたの家族は新垣の壕にいるといって、この壕を教えたそうです。それで手榴弾三つ持って来てですね、もしもおかあさん方が敵に囲まれた時は、この手榴弾を、一、二、三で打ったら、もう誰も残りはしないからといったんですよ。そうしていっしょにいてくれと願っても、わたくしたちはもうどこかに移動して、津嘉山ではないから行きますよ、といって行きましたよ。六月の一日に新垣の壕に行ったから、もしかすると五、六日だったかもしれない。

上の女の子と十一歳の男の子とが出て行きましたら、もう五人しか残っていないので、おばあさん、もういっしょに死のうかね、とわたしがいいましたから、おばあさんは、おかあさん、水を汲んで来て飲ましてから死んで頂戴いね、今手榴弾を投げてはいけないよといいました。また壕並びは、新喜屋武小（屋号）といって、こっちもお婆さんがいましたからね、そこのお婆さんが、赤ん坊の這いはいするようにして来て、敵が来ているがどうするか、わたしたちはタオルを首に巻いて、もう死ぬつもりだよーといって、来ていましたからね。わたしたちも、フジ子がこっちに手榴弾、置いてあるから、その覚悟ですよ、そう話しているうちにですね、宣伝びらがパラパラして、また飛行機からですね、低空して、こっちの壕に入っている人たちは、この一時間以内に出たら命は助けてやる。男はフンドシ、女はスカートでね。そのまま出てこい、出てこい、出てこないと、今一時間以内に、迫撃砲で撃つからといって、夜明け方、目の前でいうように聞こえましたよ。

註、飛行機が低空して、呼びかけたというのは錯覚であろう。速度が早い、爆音で妨たげられる。それで、たとえ飛行機から呼

びかけても聞くことができるとは思われない。宣伝ビラがパラパラと、錯覚で、パラパラは、飛行機、あるいは地上での機銃射撃の音だと思う。

そうしたら、おばあさんが、兵隊さん、助けてくれといって、あんたが出て行きなさい、言葉は知っているのにね、と頼んだら、兵隊さんも命は助けてくれるだろうよと八十一歳のおばあさんがいいました。

それから、おばあさんが、早く水汲んで来なさい、といいましたから、道を一つと、畑四畝と、それから中通りを越えての樋川、その上の土手には機関銃構えておるし、どうしても水汲みにはわたし行きえんですね。そしたらおばさんが、兵隊さん、水も汲まさない、もう死のうね、といいました。その時、下の壕から兵隊が出てですね、友軍の兵隊が、おばさん、人民は死なさないから、もう出る方がいいですよ。まあ、夜が明けて、あなた方が出られると、こっちは、もうすべてやられてしまいますよ。嘘ではない、またこの宣伝ビラも読める人は読んで下さい、と書かれているからね。もう出る方がいいよといいましたからね。出たらどうしますかねえ、といったら、またつぎの宣伝カーから、女は、年寄りは年寄り、子供は子供、なるべくは別べつにして、出てこい、出てこい、いいますからね。先きから、もうみんな戦車の下敷きになるのかと思って、さあおばあさん、今ですよ。おばあさん、といってね、わたしは乳飲み子を背負ってですよ、また四つの子供を左手で取って、七つの子はこの手に下って、お母さんもわたしの手首をつかまえて、一かたまりになってこの壕から出ました。そしたらまたつぎの壕も出るし、もう早く出ないと出ないとというちに、もう次ぎの壕の、あの、今、豊見城のこの前あのセイホーさん、うちつくった人。あの人のおばあさんなんか髪をけずるためにぐずついていて、わたしたちといっしょに出れば何でもなかったのに、そのおばあさん、まあ一発で、ひとことも言うこともなく、すぐ倒れてですよ、壕の口に。わたしたちは、少し前だったから、あっちは兵隊だからあっちに行け行けと手真似していたから、わたしは手榴弾を二つ隠して持っておりましたからね。この手榴弾をどうするかと思っていましたが、それをうしろのおばあさんに渡して、すててですね、信管も抜いてありましたけどね、破裂もしないで、おばあさんのうしろに捨てましてですよ、そうして、兵隊に囲まれてですね、そうしたらまあみんな上にあがって。出る時にみんな泥んこになってですね、子供たちも地べたに坐っていたのですから。

そうしたらこんな小さい罐詰をひとつずつあけてくれましたけれど、それは毒が入っているからあんたたち、これ食べたら大変よ、死ぬならいっしょに死ぬから、今に、戦車が来て、みんないっしょに轢殺（ひざころ）すはずだから、それまでは食べんようにしなさいよといってですね。でもアメリカの兵隊は、これに毒は入っていない、みんな食べなさい、食べなさいというんです。それでもわたしたち、少しも食べさせないようにしましたけれどもね。そうして、のぼりですから、みんな赤ん坊のように這いはいしてですよ、おばあさんも這って。少し行って休んだら、これぐらいの紙にですね、オウタトキニハアメリカジンデス、ナンデモハイデスといって、片仮名で、幼稚園の子供が書いたように書いたのをですね、わたしたちに渡したんです。それでわたしたちは、さあ大変、何んでもハイですというには、も早や戦車に轢き殺されるほかはないんだなあ、こんなに列を並んでいくものを、先き次第やられるのだなあといって、その時までは、自動車に乗せるものとは思いませんでした。戦車の下敷きになって、みんないっしょに、死ぬものと思いました。

上の女の子と男の子が出て行く時ですね、マッチとお金、お金は四百円ぐらい持たして下さいといいました。女の子はお金を全部わたしが持って行くといいましたが、まあ、お母さんたちも、生きるか死ぬかわからないけど、わたしたちも持っていようといって、四百円でありましたかね、もういくらだったかわかりません。赤ん坊を負ぶっている帯に結んでありました。

そうしたらまあ、山の上ですから、皆戦車の下敷きと思いましたけれどもね、それが、こっちに坐っている方はあの自動車、こっちに坐っている方はこの自動車、二台に配置されたが、おばあさんもわたくしも、四日も敵に囲まれて、何も食べていませんから上りきれ得んですよ。そしたら尻からまた兵隊が押し上げて、前からも手を引き上げてですよ、おばあさんもこの子供たちもいっしょに、稲嶺（大里村）ですね、稲嶺の収容所に収容されて、あっちで下されました。行ったらまあ、大勢の人が、まああっちに集っていますね。そしたらこっちで川の泥水か、わかりませんけれども、はじめてこの泥水を子供だちにもやったですよ。そうしたらこっちからまた今来たトラックはそのまま、水を飲んだらまたこれに乗りなさいといって、それから百名の方に、その百名の部落につかないうちにまた車は、またこいといって電話か何かかけられたそうです。それで二人の兵隊がこのトラックからおりろといって、わたしについて来い来いといって、どこの曲り道でありましたかな。富里・当山（玉城村）といいましたかね、あの曲り道から降されたんです。兵隊がキビを折って来てくれて、杖にさせましたが、わたしも右にも子が下って、また左にも子供が下がって、もうその時からは、おばあさんも歩きかねていますからね。この百名の方にちょうど四時頃、五時頃か、まあ時間もわかりませんが、その百名の方に一晩泊ってですよ、小屋に。そうしてあっち行ったらまあ大勢の人がいて、子供たちには箱持って来て、クラッカーをひとつやって、また多い時には、二つずつ配給あるよ、あるよといって、それから握り飯もこれぐらいのもの（手で示す）みんなにやってありました。

そうして収容されているのは助かって収容されているから夜どうし、話していますうちに、こんなに人が死んで兵隊も死んで、この戦争は人民も兵隊もいっしょだから、わたしたちもみんな、いっしょに死のうねと話しました。

子供等も、ひもじいはずですけど握り飯を半分も食べませんでした。わたくしたちはですね、誰も食べませんでした。子供たちは、それでも少し元気がでました。

百名に一泊しましたからですね、また、この土手の上に泊っている方は、みんな知念に行きなさいということになってですね、どんなにされるかなと思いました。

そうして知念村の山里に来てですよ。こっちは、味噌の配給も少しずつくれて、また何もかも配給があるよ、芋もあるよといいましたけど、もう女ばかりですからね、何んの希望もありませんから食

べないで死ぬ方がいいと思って、海辺へもわたし二度行きました。
　でもまた、この子供たちもいて、おばあさんがいるから芋取って来て、こんなにするうちに四、五日も暮らして、そのうちにまたおばあさんが、頭痛いといって、わたしは何を食べても、もう死んでしまうんだから。もうおしまいだよといって、ほとんど何も食べてないのに、あげようとしても、こばんで上りませんでした。
　それでもおばあさんは、次男坊の名を呼んでですね、次男坊はセイコウですから、セイコーよー、セイコーよー、といってですね、またわたしを、お母さんと呼んでいましたがね、おかあさんこっちきて、こっちきてといいまして。そうするうちに、抱いている子は乳もないし、敵に囲まれて四日間わたしが何も食べていませんからね、もうだれてですね。何もいわずに先きになって、色も真白くなって死にました。(声が上わずって泣きながら)わたしはこの子を山里の阿檀垣に埋めて帰って来たら、おばあさんが待ちかねていたらしく、お母さん、お母さんと呼んで枕からトンと落ちましてもうそれきり(しばらくいきをのんで、声が止まる)。
　わたしは女の子が二人いますが、さあ、お前たちは先きに死ねば、わたしはわたし自分で死ぬんだよと、いっておりましたがね。
　その時に、上の長女が、男の子といっしょに、後なり先きなり、わたくしたちより一日先きに稲嶺に来て、兵隊に看護させられていたといって、この長女が来ていたですよ。あれまあ、お母さんたちは亡くなっていると思って、手を合わして合掌したんだのに、生きていられたんですか、といいましたから、お前は女が生きて来て、セイコウはどうしたかと怒鳴りましたら、お母さん、何日かかっても、この子はわたしがさがして来ますから、体を無理しないで下さいという。
　この子は元気ですから、どんなにしてでもさがして上げます、といい、今日もあしたもどこにいるかねといって、この子は起きたらわたしに叱られると思って、この弟をさがしに出て行ったですよ。それで人から、弟が久手堅(知念村)というところにいるということを聞いたそうです。でも久手堅へ行く途中の知念の上原には黒ん坊がいて年頃の娘の一人歩きはできない。
　それで、百名の事務所へ行ってさがしたら、久手堅へ行った名簿がありましたそうです。そうして、黒ん坊のいる上原を越えて、久手堅へ行って弟をつれて来たら、お母さんの心がどんなにか安まるだろうというので、三度も上原を越えて行こうとしたが、三度とも戻って来てですね、もうお母さん、上原には黒ん坊が大勢いて、今日も行こうと思っているのですけど、とても上原から下りて行かれませんよという。それではもう生きていても、何の甲斐もないよ、何ののぞみもない、そういっている時にですよ、樋川へ行ってこの子が洗濯している時にね、百名からの人が三名ずつ二組、六名が久手堅、安座間、あっちに行っている子供をさがしに行くという話をきいたそうです。それで、わたしも連れて行って下さいといって、樋川から出たです。それでこの人たちは、いいといってですね。
　それから、大きい道を通って、知念部落を越えて、久手堅まで道ずれがあったといって、この男の子を連れて来たんですよ夕方。あれッほんとまことか、お前ひとりでも生きているから、もう今はこの子たちも死なしてはいけないよ。お母さんも死なないよといってね、こんなにして姉(長女)が帰って来ましてですよ、看護婦から注射も持って来てありましたよ。おかあさん、何も食べてないから、注射をやりましょうといいましたから、いいえ、わたしは生きられるだけでいいから、この四つになるのにやってくれといったら、あれにはこれ、これにはこの注射があるからといって、注射を二へんぐらいやられましたかね。もうわたしは、骨と皮になっていましたけどね、この子が帰って来ましたから、まッ黒の雲の中から飛びおりたように心が晴れて、まあ、あなたがたどんなにしていたかといったら、この子はもう口も元気ですからね。お母さん、もうわしたちアメリカーに出て来い、出てこい、もう出ないと、といったから、わしすぐ、壕のいっぱい人がいたが、真先きに手を上げて来たら、罐詰もいっぱい、うまいものをくれてですね、もうわしらは、何にも不足はなかったよ、といったから、ああー、そうだったかといって、アメリカーが食べものをくれて生きている子には、ほんとにありがたく思っていますしね、死んでいる長男と次男坊、ひめゆりの塔に祭られている女の子、これだちには敵だけれどもね。生きている子に対してはもう何とも言われません(泣きじゃくる)。
　主人は帰って来ません。いっしょにいた渡名喜ヨウエイさんというてですね、その方が、与座・仲座というところでですね、知念に来てですね、あなたの主人は、防衛隊で弾に当ったので、わたしがちゃんと、人かまいのないところに遺骨を立派にしてあるから、平和になったら、取って上げますよといっていましたよ。
　そうしてその方がですよ、知念から奥間へ来て、奥間から上原へ上って、その頃は団体で　あの新垣とかいうそっちへ、みんな遺骨を取りに行きましたよ。
　主人の遺骨は、渡名喜さんがつれて行って、ちゃんとありました。でも、次男と長男と次女は、ぜんぜん遺骨がないんで(泣き声で、しばらく言葉止まる)。遺骨さえあれば、死んだかと思いますけれどね、生きているようで今も、洋服なんか、また似た子供たちが通る時にも、わたしの子供のように思います。
　上の女の子は産婆学校卒業していまして、兵隊の看護婦させられましたが、破片の疵は、しばらくは大きくはれていましたが癒りました。

仲座方亀(二十七歳)　防衛隊

　わたくしが防衛召集されたのは、昭和二十年の二月二十日、与那原、ウドウ部隊特攻隊に入隊しました。隊長の階級は少佐です。
註、防衛庁、防衛研修所戦史室著、『沖縄方面陸軍作戦』付表第二、本文四三四頁、海上挺身第二十七戦隊の出撃等によれば、海上挺身第二十七戦隊、与那原・板良敷駐屯は、長、岡部少佐で、海上挺身基地第二十七大隊は、基地与那原と推察されるが、長は有働憲祐少佐、二十年二月に独立第二十七大隊に改編されている。談話者は、その改編に際して、多くの軍事未教育県民と共に、この隊に召集入隊させられ、海上挺身二十七戦隊のために、地上労務に使役されたらしい。
　それでおかしいことには、こういうことがありました。わしは歩兵ですが、船舶工兵隊ということになりました。その工兵隊は何か

といえば、壕掘りですね。それからワクをはめる、資材を国頭から運搬する。それから特攻隊の船ですね、爆雷を積んで、与那原から毎日朝晩訓練する、二月二十日から三月じゅう。それも与那原の町の真中から、リュー褌というので、褌だけです。裸かで、わしらはかついで。

その船といっても、今の刳舟ですね。あれに似たようで、エンジンは戦前のあのトラックですね、二屯車ですよ、ランプ揚げるカーボンで。あのエンジンをつけて、そうですね、マイル数が二十五ノットぐらい出おったんです。それで出したら、津堅までだったら、すぐ見ているうちに向こうを一周してくるぐらいでした。飛行機とおなじぐらい早いじゃないかというぐらいだったんです。

それで中城湾へ入って来ると、まさか中城湾には、津堅と今のホワイトビーチですね、向こうは狭いんですから、向こうで包囲して、絶対入れさせないというんで、そういっていたんです。それは陸軍での話でしたが。

わしたちは、勝連、与那城から中部全体の防衛隊が与那原に集まりましたから、二千人ぐらいでした。今の与那原小学校のところですよ、あの隊は、沖縄での大きな部隊でした。板良敷（与那原の東東南一キロメートル、現与那原町の一部落）の壕にも特攻船と弾（たま）を隠してありましたが、あの壕も、わしたち全部沖縄人の防衛隊が掘ったんです。夜昼交代でですね。

朝晩、船を出す練習ですね。その時は、わしはいつも先頭ですから、背が低いでしょう、海に入る段になると、前は深いので、いつもあっぷあっぷして、すがって、巧くはずしていました。船を出す時は、五十名ぐらいおったです。班長は、池田兵長ですが泡瀬の人でした。

それから、防衛隊はですね、ほとんどが、未教育の者で、二等兵といっても、ほんとの二等兵ではないんですね、仮二等兵でした。それでまあ、何にもしらない仮二等兵が、ずっと練習の特攻船かつぎをしてですね、絶対中城湾に、敵艦は入れないといっていたがですね。

ところが、皆が知っているように、今の浦添、上の屋あたりを見たら、全部電灯で、昼みたいですね、もとは山だったが。あれよりも、もっと昼みたいに、沖縄の海全体、昼みたいで、軍艦が取り巻いたんです。

それでわしらが特攻船を出したら、敵は電波がすぐれておるんです。エンジンつけて出しても寄りつけない。機関砲が雨霰のごとくですから。昼は出せないから、夜明けか、晩おそくなってから出すんですが、全然当らないわけです。

それから弾と船は板良敷に置いてあったんです。それで、むこうからかついで、だがむこうも、敵の砲弾で、また日本軍の爆雷でも爆発して、ますます被害は多かったんです。

註、前記『沖縄方面陸軍作戦』の記事と一致している。「第二中隊は、二十六日夜、中隊全力十五隻の出撃を準備したが、爆薬誘発事故、及び米軍砲撃による損傷で、出撃は二隻のみ」四三四頁。

してもうこれは駄目だと、それで敵が那覇港に入ったという、一日橋までですね、あそこに担ぐいで行って、夜ですよ、あそこから

出したんです。一隻担ぐのは四名です。

それから特攻船は、二割ぐらいしか残ってないんです。それも、出て行くとですね、敵から見えるから撃たれるだろう。まあ弾が雨霰だから、どうしてもこれはできんとわしらも想像しているが、命令だから船は出すんです。その連中は明日は出発という時は、慰安会があったわけです。

そうして特攻兵だからといって、またそうでないでも本土から来ている兵隊は、白米ですよ。しかし沖縄の兵隊は下士（官）が三人、兵長一人、それに上等兵がいくらか、残りは全部一つ星です。一つ星といっても日本の軍隊では、仮二等兵ですよ。一期の研修が終ってないから。だが、勇敢だったですよ。そうして米もなかったわけですよ、芋飯（芋をねったもの）ですよ。防衛召集だから。それで、わしらは支那事変も行っているし、まあ与那原も近いから町に行って、民家で御馳走なることもあるが、初年兵がそんなことをするとビンタでしょう。それで、まんじゅうを買って、まんじゅうといってもタピオカと芋で作ったもんですよ。それを買って行って、初年兵にあげることもありましたよ。わしは上等兵で、伍長に二階級特進させて貰ったですが、上等兵でそのままですよ、伍長のそれは無いんですから。

それから、与那原を、われわれ防衛召集兵が撤退したのは、四月中旬ですね。お前たちは船を出し終ったのだからといって、それで南風原村の津嘉山の東がわに行って、自分たちの入る壕つくりをして、重機関銃の壕とか、皆の入る壕、隊長連中の壕掘りでした。

ところがその中間にですね、あまり部隊で、もう地上砲火から艦砲射撃で、雨霰でしょう。今まであった畑がですね、一トン爆弾といいおったんですが、この家（建坪四十坪以上と思われる、道路に面して間口七間ほどの店になっている農村では稀れなブロック建築）ぐらいの穴があきおったんですよ。そこに溜る水を、井戸もどこにあるかわからんから、それから汲んで飲んでおったんです。

それから沖縄の避難民ですね、兵隊が、おい、お前たちは戦争の邪魔になるからあっち下れといって、人の壕を盗んで、これは沖縄人兵隊ではないんですよ。わしたちは同じ沖縄人として人情上、そうはできんが、内地の兵隊は、壕から避難民を追い出した上に、米でも持っていると奪い取って、これだけしかないから持たして下さいといったら、お前たちは国賊だ、芋を食へ、といって壕を盗んで追い出しておったんです。

その時に、敵の弾がひどいので、あまり重傷患者が多くてですね、わしたちの部隊が。沖縄人戦死以外に五十名ぐらいだったでしょうね。爆撃でやられたわけですね。それで、中松曹長が、わたしに、お前行って、キビなんかさがして、この連中にくれるように考えてくれんかと頼まれたわけですよ。

それでわしは第一病棟へ行って見たんです。そしたら、もと嘉手納で開業していられた比嘉先生が、軍医中尉でいられるし、今の平良歯科の平良博士ですね、その方がそこにいられて、お知り合いになったわけです。比嘉軍医は内で治療していられたが、沖縄のひめゆり部隊ですね。この連中は、看護婦といっても未教育ですし、階級もないから、患者たちは、おい、膿器持って来い、便器持って来い、といった横柄な態度でしょう。そうして、それでお前たちは沖

縄の看護婦か、といわれて、ひめゆり部隊、非常に軽蔑されておったです。飯は、一日五勺ぐらい、それを二度にわけて、おかずは野菜もまったくなくてですよ。

それからわたしは、球菜(たまな)をさがして、部隊に持って来たんです。また、津嘉山に製糖工場がありましたがね、黒糖が樽詰めにして四十五もあるんです。それでわたしは、一つかついで行って、部隊の患者や皆に一斤ずつ、帯剣で割ってやったこともありました。もうその時は、食い物も、水さえない時でした。

また、わしは考えましてね。今の間にかついで来ないと、焼けてしもうからと、もう一梃かついで来て、皆のあとのために置きました。水のかわりにはキビを取って来て、それを三分の一、四分の一ずつに切って、分配してやる有様で、食い物といえば、その黒糖と球菜だけでした。そうしてそこに二十日ぐらいいたわけです。

明日はそこを引き上げるという時ですね。津嘉山の部落は中央に道があって人家が左右にありますね。先きに行ったらそこに製糖工場があったんです。今はありません。その先きにわたしは、防衛隊の戦死者を埋めたので、戦後になって、遺骨とり、ぬぎは(鎮魂)のために家族に頼まれて行きましたが、今は原野になって形跡もなくなっているんです。そこにまた、わたしのおばさんの夫がやられている話しをききましたから、行って見たんですよ。そうしたらやられて倒れておったですよ。それで、その立ちのきは五月でなかったですかね。小満・芒種で雨ばかり降っていた頃でしたから。

その時でした。比嘉さんという看護婦さんが、日本軍は、立ち退きの時、歩けるものは、後退するようにするが、足をやられたり、重傷患者は、明日連れに来るといって、握り飯を大きなの二つずつ渡して、一つは夕飯にして、一つは朝に食べるようにするんですね。そうして、それには、青酸加里を入れてあるので翌日になると皆、死んでしもう、ということを知らしてくれた。

それで真栄城アンエイといいますが、この人を連れて行かないといけないと言ったんですね。その看護婦は与那原の人といいました。七、八年前、中部病院に火事があった頃、看護係長でしたが、もう婦長になっているかもしれない。今四十五、六歳で元気ですよ。その時、北中城の安谷屋の人で、ペルー帰りで、わしの父親なども知っている人たちだったんですが、上の娘がその壕の看護婦だといっていました。そのお母さんが、妹の女学生をつれてですね、戦さに追われて看護婦している娘のいる壕に来たわけです。壕の入口に邪魔者扱いされて、小さくなっていましたよ。

それで真栄城アンエイですが、戦後区長も長らくやって今も元気でおりますが、あなた歩かんと大変ですよといって、大変疲れているから、水を飲まして、十歩あるいては休まし、だんだん元気を出させて、また休まして水を飲まして、最初はやっと二十メートルぐらい歩かすというぐあいでした。

津嘉山を出たのは日が暮れてからですね。夜通し雨は降るし、ぬかるみでですね。それで、山城に行ったら、病院があるといっていたのに、壕も全然ありませんよ。なにもないですよ。

それから、われわれの部隊は、ギーザバンタ(具志頭村、摩文仁寄りの海岸)あっちに行ったら、隊長は、負傷者は、隊を離れて下(さが)れ、何もできないからというんです。元気である昨日までは使って、負傷すると食い物も与えないで捨てる。自分も負傷するとそんなに捨てられるんだなと思った。全部一しょに入隊した沖縄人防衛隊ですから、わたしが、米一俵部隊から取って来て、命令だから隊を離れるほかはないと話して米を分けてやって、元気づけてやりました。

それからわたしの部隊は、人数もいなくなったので解散の命令が出ました。それでわたしは軽機関銃隊に入りまして、与座・仲座の仲座へ行ったんですがね。仲座は、住民一人もいないでほとんど焼けていました。そこにいる時に敵の戦車隊と戦争して、爆弾も受けたが、わしは運よく、前の二人、後の二人は死んだのに生き残ったこともあったです。

与座・仲座があまり激しいので、そこから高嶺の方へ行ったんです。高嶺の製糖工場行かない手前に、屋取りがあったですがね。そこは、家もあって、民家の人たちは、夜になったら飯も炊いて食えるし、芋だってあったんですよ。

そこに子供を二人つれた女の人がいたんですね。子供をつれているもんだから飯を食っているかどうかわからないんです。どこから来たかと訊いて見たら、北谷から来た。四月一日に敵が上陸したら、すぐ捕虜されて、浜辺にいるように集められたが、わたしの夫は島尻だから、夫をさがすため収容所から逃げて来たというんです。裸かで逃げ出し、裸かといっても着物一枚着たきりで、子供は二歳は男、四、五歳は女だが、二人は、ぼろを着せてですね、何か食べたかと訊いても黙って何もいいませんでした。まあ、何日か、何も食べていなかったでしょう。それで、わしが、持っている米を、わしは行って取ればあるから、罐詰と米をその人にあげました。それから、ほかの兵隊たちにも言って出させてやりました。また子供が、裸かとおなじですから、皆にも下衣を出させて、それで子供の着物をつくって着せなさいといってあげました。

それから、与座・仲座での戦争が終って、摩文仁に来た時ですよ。わたしは二メートルぐらいの崖の上を歩いていた時ですね、弾着が近くて放り出されたわけです。艦砲が爆発したのでしょう。それで、わしは真逆さまに落ちるのを同じ連中が見ていたそうです。あれがやられたといって、皆黙っていたそうです。それでわたしは五分ぐらいして、おちついてから、右だったですから、さわって見たわけですよ。足はあるんですよ、血もでないなとわかった。それで泣いて皆来てですよ。おい、仲座は生きてるよといったんです。それで皆が、背嚢も取ってやるし、鉄砲も取るし、そうして、わしは背嚢枕に寝たんですが、全然立てないんですよ。それで、皆が背嚢は持つし、鉄砲は持つし、わしは二人で抱いてですね、歩いたんですが、体が痛くて、歩けなかったが、わしもまた考えてですよ、こう抱いて歩いたんです。弾着が近くて、やられなかったわけです。わしは最後まで、弾の降りそそぐ中を、爆弾にも艦砲にも、幾度も体の前後、左右に至近弾が落ちたんですがね。怪我という怪我はやりません。ほんの針の先きぐらいも、弾というものは、当らんですよ。

そうして、弾に追われて、歩き廻ってですね、もうおしまいだから、自分たちの球部隊へ行こうということで、歩いているとですね、深い壕があるところへ来たんです。そこで、休むことにしようといって、中へ入っていたわけです。そうしたら、奥の方に懐中電

灯だったですが、光りが見えたんです。わしらは銃を構えて、「山」といったんです。すぐに「川」と答えたので、近寄って行くと、伍長と軍曹二人だけですよ。それで、球部隊のものだが摩文仁の本部をさがしていくところだといったら、いやいや、わしらも球部隊だが、本部は二、三日前にすっかりやられて、逃げて来たんだ、もう最後だ、恩賜の煙草もいっしょにいただこうと一本ずつくれた。わしらも長く煙草を吸っていないので、久しぶりに煙草を吸いましたが、お前たちは、これからもう少し下ったら、いい壕があるから、そこへ行きなさいといわれたわけですよ。

そこに行って、二、三日いたら、もう摩文仁に帰って行けないんですよ、追いつめられて。それから山城の陣地へ行かない手前に、民間の壕があったんですよ。ここは静かで、いいところだと思っていると、敵といっしょにいたようなもので、あんまり接近しているもんだから、敵は撃たないんですよ。爆撃もしない。それで二日ぐらいそこにおって、夜は飯も炊いて食っておったんです。三人だったが、一人はいなくなって二人になっておったんです。

それから、昼だったんですが、山城の陣地へ行こうということで、しかし敵はすぐ近くにいるので撃つだろうと思って、わたしから行くから、その様子を見てあなたもついて来なさいといって、地物利用して走り出したわけです。敵は、射撃しているわけですが、走っては地物利用でかくれ、また走り出すという具合に、山城陣地まで、三尺ぐらいの距離に弾は落ちるが、なかなか弾なんて当らないもんですね、撃てないんですよ。それで山城の陣地に五時頃着いたら、擬装しているがそこに壕があるのをすぐわかったんですよ。そうしたら、ここはね、石部隊の残りで、中隊も全滅してこれだけ残ってここで死守するから、あなたがた下ってくれないかといわれた。せっかく行った山城の陣地から離れて、喜屋武の近くへ行ったわけですね。そこは爆撃が非常に激しいもんだから、それで、つれの初年兵は地物に残して、わしが壕さがしに行ったわけですよ。そうしたら、その時にまた第一病棟の衛生兵と、平良先生とあったわけですよ。まだ生きていたのか、元気だったなあ、というわけで、いっしょになってくれないかと、平良先生に頼まれたわけですよ。それでわしらは七、八名合併になって、そうして、二十四、五日、その三、四日前に、部落民、三十四、五名ぐらいだったですね、自分の部落の人たちだったんですよ、喜屋武岬まで行かないところ、何浜とかいう浜辺だったんですよ、兵隊ではないから殺さない、出なさいといって出したんです。

ところがわたしは追い込まれてですね、壕をさがしても、壕はないんですよ。阿檀垣でこっちから追って来たらあっちへ逃げるという具合で、人間というものはおかしなもので、逃げて行かねばならんのに、大勢いると、気が強くなって、その中、阿檀の中は全部人間ですよ。

註、そこには同席の普天間さんもおられた。そのお話では、追いつめられて、もはやほかに逃げ場がない最後の場所として、大勢の一般避難民が集まっていたので、大勢いると気が強くなって集まっていたのではなくて、孤立は心細く、大勢は心強いということ、あるいは大勢いるゆえに、却って敵弾が打ち込まれはしないかという恐怖心などが意識の底に全然なかったとはいえない

かもしれないが、生きのびようという本能でおのずから同じこの阿檀垣に集まっていたということに受け取られた。

それで哨戒艇が海岸まで来て、その四、五日前から、兵隊は褌一本だけの裸かで、住民は兵隊と別べつに、兵隊といっしょになったら、間違って撃たれる惧れがあるから、学生も出て来い、沖縄は負けて今から戦争はないから、いっしょにこれから新しく沖縄を建設しようではないかと、どこの先生かしらないが、マイクで呼んでいたんですがそれでも出ないんですよ。それでも出ないもんだから、こうしおったんですよ。またあくる日は、その哨戒艇が来てですね、あしたも来るから昼出て来い、夜来たら撃たれるから危ない、といっていたんですが、その時飛行機が飛んでいて、あなたがた出ないんならこうするよといって、ドラム罐だったです。ガソリン、それを落して、照明弾やるでしょう。そしてバラバラみんな焼くんです。あしたも出なければこうするからというんです。あなたがたもう出なさいといってここわしが、二十五日に出したわけです。

そうしてわしがつかまった動機はですね、皆な出したあと、壕といっても小さい石の割れ目があったわけですから、もうわれひとりだから、自決の手榴弾一つ持っているから、わしは皆を出した時、言ったんですが、この方のお父さん（普天間さんの主人のこと）帰って来ているんです。どうしたかといったら、お前の手榴弾でわしも死なしてくれというんです。何をいうんですか、あなたは兵隊でもない。家族もいっしょだのに、強いて死にたいなら手榴弾なんかいらない、家族四人みんないっしょに帯ででも死なれるじゃないか、その方がいいじゃないか、二人争っていると、阿檀の中だが隠れていたわけでしょうな。四方八方からわしら二人が囲まれたわけですよ。四名だったんです。わたしは、ポケットに手榴弾も持っているし、死刑になるんだと思ったが、えーいッ、どうでもなれという気持でした。

住民が出た時は、この方が（普天間さんを顔で示す）まっさきで、部落のものは三十五名ぐらいですかね。大体兵隊は自決してほとんどいなかったですね。避難民はそれは大変でいっぱいだったんです。

わしの家は三男家ですが、本家は今度の戦争で全滅です。当主は防衛隊で、喜屋武ではいっしょになったことがあったが、これも死にました。長男は満洲に出征して、死にました。娘は部落から学徒動員の看護要員といって取られて、破片で死んでいます。同期生二人は生きています。でも遺骨はありませんでした。次男は、師範学校で、戦死です。本家（防衛隊）の兄の妻も弾で死んで、このようにして全滅です。

わたしの家は、おじいさん、おばあさん、わたしの家内、誕生になっていた三男坊、四人が弾や破片に当っていなくなりました。

富島喜松（二十四歳）　現役兵、北支

わたくしはちょうど昭和十七年の三月一日に、熊本、菊池郡の航空整備部隊に入隊しました。そこで四か月の教育を受けまして、十七年の七月、出発の日は覚えませんが、満洲のハチネンドウというところに七月十六日につきまして、むこうの部隊といっしょになり

ました。わたしたちの部隊は二〇七飛行場設営隊といいましたが、そこには四日間いて、北支の北京郊外の南苑飛行場に移りました。そこには八か月ぐらいいまして、また初年兵教育を受けましてですね、それから錦城で二〇七飛行場大隊を解散し、天津に三〇一部隊という操縦士訓練部隊がありまして、そこにまた配置変えになりました。

そこでは少尉、中尉などの操縦訓練をやっていましたが、その人たちの飛行機の整備をやっておりました。

それから、また天津から、何といいましたか忘れましたが、移動して、そこでは少年飛行兵の訓練をやっていましたので、われわれはその整備をやっておりました。

それから十九年の十二月です。うちの部隊はまたもとの北京の南苑飛行場に帰りました。そこで特攻隊というのができましたので、われわれは特攻隊整備部隊ということになりまして、略して第三特整といいましたが、それが第五特整までありまして、われわれの隊が、曹長以下二十九名でありました。あちこちから少年特攻隊員が来ると、うちの部隊はその要員教育もおこなっておりました。うちの部隊からもよく出ましたよ。台湾沖海戦ですか、あれには特攻隊が出ています。

そうしているうちに二十年の七月十七日頃部隊からも何名か前線へ送るために特攻隊を出したわけですね。それを追って整備に行くということで、天津へ七月の十七日から二十六日までの予定で行ったわけです。その時は曹長以下十名行きまして、そこで二十五日まで整備して二十六日に出発する予定でした。

その日の夕方ですね、福岡の山下等というわたしと同年兵でありましたが、十名の中から二人引っこ抜かれてですね、君たちはアルコール燃料教育のために入学を命じるという命令を受けたんです。

ところがその時はすでにアルコール燃料は使用していたんです。それで使用しているのに今頃からその教育のために入学とはおかしいなという感じを受けていましたが、その二十五日晩は大雨でしたがね、その大雨の中で一晩中整備しました。二十六日の朝は天津まで八時までに来いという命令が来ましたので、うちの中隊長は茨城出身の小林という方であったが、その人と、うちの第五特整から七名、第三特整から七名、第七特整から七名で二十七名でしたが、その時は沖縄は玉砕、本土が危いことになっているというんで、本土へやられる場合の特攻機の整備ということでした。

そのころ、わたくしたちの管轄である北支の方が危いからというので、朝鮮の京城に移動することになりました。そうして、向こうの司令官は島山中将でありましたが報告しましたら、そんな命令を出した憶えはない、おかしい、ということになりまして、その近くに第三飛行場がありましたので、そこへ行って見ないかというので二十七名そこへ行きましたらそこでもわからん、また引っ返して来たんです。

そうしてまた本隊に引っ返して行ったんです。よくしらべて貰ったらはっきりして、君たちは、入学ではなくて、大邱の特攻隊部隊が、若い兵隊たちで困っているから、そこへ行くんだというわけで、大邱へ行ったわけです。向こうでは三週間の予定ですね、八月の十八日までの予定でしたが、八月の十五日に終戦になりました。

復員したのは二十年の十月の七、八日頃ですね。ところが復員をするに当りましても、朝鮮で沖縄の玉砕を聞いていますので、心の底には、家族がどうなっているか、ということはあったわけですね。そうして九州の熊本の方でお世話になりました。そうすると、沖縄の戦争に出た兵隊が帰っていたそうですが、その親戚の方から聞いたわけです。沖縄は戦争でも住民が酷くやられたが、戦争に生き残った人も物資が乏しくて、ほとんどの住民が餓死で亡くなって、生き残っている人はほとんどいない状態だ、という話であったんですね。

熊本でわたくしは、長崎中外ソシン株式会社の熊本出張所に働いていましたので、向こうとしても沖縄は玉砕しているのだから帰らない方がいいだろうとおっしゃいました。わたしも一応は、ほんとは帰りたいという気持ちはなかったわけです。戦さはそうなったんだから、果して帰ったら沖縄でどういう生活するかという気持を持っていましたんですね。それでも、あるいは家族も戦っているかもしれないし、親兄弟のことも思われるんですし、帰って家庭の事情をよく調べて見てから、ふたたび本土へ帰って行くつもりだったんです。

郷里へ帰りましたのは、満一か年経って、二十一年の十二月でありましたが、船の上から離れて沖縄を見た場合は、はっきりわかりませんでした。那覇の港についたのは昼でした。

那覇の港につきましてからね、碇船してから何時間かおいてからこっち（東海岸）へ廻って来たんですが、那覇港に着いて見た場合は、十七年に沖縄を那覇港から離れて熊本へ行った時の元の那覇市は、全滅して、何一つ残ってない凄まじい戦禍の被害、これを見た時は、今度の戦争は沖縄がやったんだなという感じを強く受けました。

といいますのは、わたしは、十七年二月に入隊して整備兵で戦争の激しいのを見ていませんので、那覇に着いたら第一番目にその感じを受けましたですね。戦前はどこでも木が見えたが、まったく木がないのでこれでも、大変な被害を受けたんだなと思いました。この丘（中城村の役所で補遺のテープをあとで取ってた関係で今の村役所から見た高台をさす）が戦前には鬱蒼と被うていた松の山がすっかり木は無くなって、ススキだけしか少しずつ生えていなかったので、大変なことだったなと被害を酷く受けたことがよくわかりました。

久場崎に上陸いたしまして一晩そこで明かしてから、南上原の人たちが奥間（中城村）で避難して、もうその時は避難ではなくて集団生活をしていましたので奥間へ行きました。

中学校前（現在の）で仲座亀次さんという方がおられました。その方は戦前うちと近所でございました。その方が農協におられましたので、その方からわたしの従兄弟が、南洋から引き揚げて奥間に来ていると聞かされました。それでわたしは早速従兄弟を訪ねて行きました。それで従兄弟は、わたしが行った場合はですね、わたしが久場崎に来たということを聞いたんですね。それでいとこは、わたしが行った時はですね、わたしの母のところへ連絡に行っていなかったわけです。そうしましたら、そのいとこの長男がですね、今は四十幾つになっていますが、その時は十六、七であったんです。

それにあったら、お父さんは、おじさんが帰っているということを聞いて、西原の棚原にいられるおじさんのおばあさん（お母さんのこと）に連絡に行ったんだといったわけです。それで、母が生きているということはわかりました。西原村の棚原部落には、わたしのすぐ上の姉、三番目の姉が嫁いでいますので、そこで母が厄介になっていることがわかりました。

それでわたしは従兄弟の帰りを待っていて会ったわけです。わたしは単刀直入で、従兄に、最初に、わたしは本土で沖縄の玉砕状況は聞いて覚悟をきめておりますので、素直に言って貰いたいとそう申し上げたんです。そうしたらその晩、従兄がいいました。沖縄に帰る人に最初は、家族の悲報を隠すということを聞いていましたので、従兄にはっきり、素直にほんとのことを話して欲しいと強く言ったものですから従兄も隠さず、母ひとりだけ助かって、十人の家族が全滅していることをはっきり知らしました。

いくら覚悟をきめているとはいっても、十一名の家族から、母ひとりだけが生存して、十名の肉親が死んでいるということは、わたしが、感情を押し殺すように、考えまいとしても、心の底には、大きな悲しみはあった筈です。

戦争で生命を失なった肉親は、父、わたしの妻と四歳になる子供、それに十七歳になっていた妹、兄嫂、兄の子供等わたしの甥や姪が五人、計十名が、わずか一、二か月で、むごい戦争の砲火で生命を絶たれたわけです。兄の一番末の子も、わたしの子供もわたしが兵隊に召集されてから生れていました。わたしの上の娘は、わたしが召集された時は、数え年で二歳、満一歳でしたが、これは戦争のためではなくハシカで亡くなって、合計十一名が亡くなっていたわけです。

しかしわたくしは満三年八か月兵役にいましたし、こうなっては、どんなことがあっても、沖縄の再建、自分のうちのことをやって行かねばならない。大きな不幸の中に母が生存しているのだし母を見なければならない。兄は台湾に生存しているということはわかったが、まだ帰って来ない。ここで弱い心を見せてはいけないと心を強く抑えました。

兄は海軍で、佐世保の海兵団に入団しまして、旅順基地に行っていました。その間は、お互に文通していましたが、兄が台湾へ移動してから後は、音信も不通になったわけです。わたしは前にも申しました通り、八月十八日には北支に移る予定だったのが、十五日に終戦になってそのままになりました。それで兄はたしかに朝鮮にいる、そうして戦死してなければ九州にいると思って、引き揚げて復員したところなどあちこちさがしました。あるいは戦死したのでないかと思って、遺骨のあるお寺などもあちこち廻りましたが、まったくわかりませんでした。兄が台湾にいるということは、沖縄に帰ってからきいたわけです。

その翌る日わたしは、奥間の駐在派出所にお願いして、母を棚原に訪ねることにしました。その前の日から、奥間から南上原への移動が許されていたのですが、しかし区域外の棚原にはまだ許されていませんでした。駐在所では、南上原まで行ったら棚原へ行けるだろうといわれて、南上原へ行って見たんです。そうしたら自分の生れた家がどこにあったのか全然わかりません。戦争に荒されて道

もわからない、畑もわからない、草叢になってですね、畑というより、原野の状態になって、これでは、沖縄の戦争は大変だったな、われわれ外地できいたり、予想したよりは、遙かに凄かったなという感じを受けました。

そのころは、移動が始まって、南上原へ帰っている人もおりましたが、日中は、移動しておらない人でも畑仕事で行っていました。その人たちにあって、母をさがしに棚原に行くといったら、お母さんは、いとこの方といっしょに、いとこさんの方へ行かれたと教えてくれました。わたしは、従兄弟のところへ引っ返しました。いとこの現在の家で、いとこの方でもまだ移動はしていませんでしたが、住む家をつくっているところでありました。建築といっても、戦後の疲弊した中でのことで、掘立て小屋同様のものでしたが、そこで、おふくろに会いました。わたしは十七年の一月に召集されて、二十一年の十二月ですから満五年経っていたわけです。

わたくしは、覚悟している気持を崩してはいけないと、心をおさえて母に向かいました。そうしてわたしからおふくろの顔を見た場合、抱きついて来るでもなく、堪らないらしく涙は流してはいますが、近ずかず、いかにも、すまない、申訳けない、といった心の中がよくわかったんですね。お父さんも亡くした、兄さんの五人の子も亡くした、お前の子供も亡くした、妹も亡くした、嫁も二人亡くしてしまった、それだのに自分は生きている、それは自分が悪かった、と考えているような母の心でした。母は、それを言い出そうとしました。

「お母さん、そんなことを今更言うべきではない、わかっています。お母さんが生きていられてよかった、こんな嬉しいことはない。」

わたしは、ここで涙を流してはいけないと勇気を出して心を支えることに努めましたらおふくろは、「元気であったな」とぽつんといっていました。それは今あって、わたしが元気であったことをはじめて知ったという意味ではありません。わたしへの胸いっぱいの愛情の表現だったんでしょうね。わたしの元気で帰っていることは、一日前に従兄が知らしてありますし、またわたしは、二十年（二十一年ではなかろうか）の十一月にですね、直接沖縄へのたよりは出すことはできませんでしたが、ハガキだけは、東京のマッカーサー司令部を通して出すことが出来ましたので、まっ先きに出しておいたんです。そうしましたらおふくろは中城の奥間にはいないので、親戚のものが持っていてですね、わたしが帰るちょっと前におふくろや姉のところに連絡したらしいんです。そうしてその連絡を取ると、姉はすぐわたしへ返事を出したらしいが、わたしが帰る途中で行きちがいになったんですね。おふくろは、わたしが元気であるということはわかっていますので、そうまで感情がひどくなかった筈です。兄も台湾に生きているということがわかっていました。

戦後、母は四、五年は健在でありましたので、母が助かったわけは、母からよく聞きましてわかりました。

戦争が北の方からやって来ましたので、十一人の大家族が、大あわてで南へ下ったそうです。兄の子供は大きいのが小学校の一年で、わたしの子供と五人は、全部学校にも行っていない小さい子供

たちで、それを引きつれて、逃げていたそうでありますが、母は途中から腹を痛めて歩けなくなったんですね。それで兄の妻やわたしの家内や妹などが背負って、いっしょに連れていってくれたそうです。真栄平までそうして行ったんですね。ところが、あんまりそこが激しいので、とてもいられないということになって、逃げなければならなくなったんですね。それで母が断って、わたしはどうでもいいから、あなたがたは何とか助かるようにしなさいといって別れたらしいんです。そうして家族たちは一応別れたんですがね、誰かが、心が忍ばれないからといって引き返して来ていたらしいんですがね、そこで母は無理に断ったそうです。

そうして母は、家族と別れて何日ぐらいひとりで飲まず食わずにいたですか、戦争はまるで雨が降るように激しく弾が落ちるが、不思議に当らなかったそうです。お腹の方はよくなったかどうか、それはくわしく訊きませんでしたが、道ばたに小さなトタン葺の小屋があったそうです。雨が降ったのでそれに入って、雨垂れから落ちる雨を手で掬って飲んでいたんですね。そこへ米軍が来てつかまえられたらしいんです。それで元気で生きていたわけです。そうしまして百名（玉城村）から知念村の山里の前の部落（久手堅らしい）へ行きまして、そこには南上原の人たちが大勢いたので、世話になって、あとで棚原へ行ったそうです。

父は、上から二番目の姉の聟さんといっしょに、真壁村（現在糸満町に合併）の新垣という部落でなくなっています。ほかの九名は、具志頭村の安里という部落で、いっぺんに艦砲で吹っ飛んだようです。死んだわたしの妻の兄が防衛隊で、そこにわたしの家族がいるということがわかったんでしょうね。それで訪ねて行ったら、夜明け前だったそうですが、飯を炊いてですね、みんなが食べようとするところだったそうです。そうしたらですね、飯ができているからあなたも食べてから行きなさいと言われたらしいんです。ですけれどわたしの義兄は、わたしは防衛隊だからすぐ行かねばならない、あなたがたもよく気をつけて下さいね、といって別れて、ものの二分か三分ぐらいしか経ってなかったそうですが、わたしの家族がいたところに、艦砲が落ちて吹っ飛んでいたんだそうです。それで、全員そこで一度にやられたんだな、とわたしに話しておりました。

安里（具志頭村）の部落のその家の娘さんも健在で、わたしは三度行っていますが、二回お会いしてききました。その方の家で相当お世話になっていたらしいんです。娘さんといっても、わたしと同年輩ぐらいの五十近いのですが、その時艦砲が落ちてやられたのは慥（たし）からしいです。家族みんなが亡くなったという場所へ案内して貰ってききましたがね、その家の馬小屋にいたらしいんです。鍋のかけらとか、底が皮の財布とか、いろいろのこまごましたものがありました。大勢の人がそこにはいっしょで、いっぺんにやられたらしいので、それがわたしの家族のものということはわかりませんでした。

父がみんなと別べつに亡くなったのも、どういういきさつかわかりません。

わたしは、奥間の山手の方、米軍が使ったコンセットで、南上原へ移った人の住んでいた後（あと）を借りて、母と二人で住んでいました。

そうして南上原に、自分の家をつくることにして、兄が台湾から帰って来るのを待ちました。

兄はわたしより一か月ぐらい後れて、帰って来ました。奥間部落のですね、その当時配給所があって、そこに戦前からの綱曳場所がございます。そこで最初あったわけです。兄が帰っているということで、迎えに行きました。見ると病気で歩くこともできない状態で、荷物も持てないのです。そこからコンセットの家までは二百メートルぐらいしか離れていませんが、疲労して弱っていますので、荷物はわたしが持って、ゆっくり歩かして連れて帰ったわけです。

それで、体も弱っている兄に、いきなり兄の妻子六人をはじめ父と妹、それにわたしの妻子合せて十一人が全滅していることを知らしてはいけないと思って、最初に、兄へ、沖縄の戦争はわれわれが外地で予想していたのよりは激しかった。沖縄全体が玉砕といってもいいぐらいにやられている。沖縄全体がこうなったからには、われわれの家にも、どんなことが起っていても悲観してはいけない。意志を弱く持ってはいけない。どうせこうなった以上は、二人協力し合って行かねばならない。母は元気だし、母のことを考えねばならない、気を落してはいけないと、兄の方へ申したわけです。

そういいましたら、兄の方でも、すべてがわかって観念したんでしょうね。もうこうなった以上は仕方ない、わたしもそのあきらめはついているから、互にやって行こうといって涙も見せませんでした。兄は体を悪くしていましたが、台湾で、中国の軍隊の労務で、病気になったんだそうですが、沖縄に帰って来たのに、当時は近くに病院もないので、家で静養して、二か月ほどすると体もよくなってきました。その間は、親子三人だけ。わたしが世話を見たわけですが、兄が体が弱って万一のことがあっても、帰って来た、互に顔を合したということで、わたしは、よかったといつでもそれを考えました。

わたしの兄弟は上二人が姉で、その次ぎが兄で、四番目がわたしのすぐ上の姉で、わたしと妹とは年が離れていました。

二番目の姉の聟さんがわたしの父といっしょに、敵弾で亡くなったことは前にお話ししましたが、その姉もやはり敵弾で亡くなりました。一番上の姉も、夫婦二人が、アメリカの弾で亡くなってしまいました。わたしのすぐ上の棚原部落の姉だけが、聟さんの家族といっしょに避難して助かりました。聟さんの方は、徴用で兵庫かへ行っていて、それから海軍の整備兵にとられて、終戦後、復員することができました。最初は姉も、本土へ聟さんといっしょに行っていたんですが、聟さんの方が召集されたので、沖縄へ帰って、九死に一生を得ました。この夫婦だけは、健在であります。

わたしの上の子供は、戦前の十九年に、ハシカで亡くなったそうです。それで母に、それだのにどうして知らしてくれませんでしたかと訊きましたら、お前は、軍務にいる身だし、知らしたってどうなるものでもないし、そのためにちっとでも兵隊の職務に間違いがあってはいけないというので、お父さんはじめみんなで話し合って知らさなかったのだ、と申されました。

嫂は十八歳で結婚しましたので、わたしと同じ二十七歳でしたが、子供は五人できていました。

そういうことで、親兄弟、聟さんたち三人を加えて、みんなで十

九人の肉親ですが、それから五人は生き残ったわけです。合計十四人が、戦争の砲火に当って、命を絶たれたのです。

わたしが南上原の自分の部落へ移動したのは、皆より一か月後れました。住む家をつくるためでした。材料もないし、人手もない、万事不自由の時でありました。それでも南上原の自分の部落に移ってから、親子三人の生活を始めるようになりました。戦前の賑やかな大家族時代を互に思うにちがいありませんでしたが、誰もこの三人だけになった境遇を口に出しませんでした。

註、富島さんは、極めて簡単にしか話されなかったが、三度に亘って、われわれが執っこく訊きただしたので、当時の考えまいと抑える心を披いて答えて下さったのである。富島さんの心を掻きむしるようで心苦しかった。また、われわれの質問を答えらる感度に、当時のすべてを忘れて生きる力を振い起されるような、異常なご気分が現れ、すまないと思い、心ない質問をすることが心苦しかった。

和宇慶・伊集（中城村）　宮城聰

時　一九六九年十月十三日
場所　新垣盛正　区長宅

氏名	現住所
新垣盛正	[redacted]
新垣ヒデ	
新垣カシミ	
儀間トヨ	
新垣三郎	
新垣トミ	

解説

新垣盛正現区長は、当時、十六歳の少年であったが、父君他二人と共に、米軍の進撃に追われて、伊集部落へ越えようとして、米軍の猛攻を受け、父君等三人は、一片の肉塊さえ残らなかった。重傷で翌朝意識を恢復したら、米軍の担架に入っており、米軍病院に送られ、そこでいろいろの特異なことを見る。

新垣ヒデさんとカシミさんは共に沖縄方言で話して貰ったが、沖縄方言には、共通語へ翻訳できないユニークな意味を持つものが多い、しかもそれが感じや表現にすぐれている。お二人とも、方言の言い廻しも巧いので、方言のまま纏めて見たい気持ちさえ起った。しかしできるだけ共通語への翻訳を語感など見のがさず正確にするように努めた。例えば「ウランド、ナトーンテー」の場合、「テー」の語尾の長さで、推量だけでなく、希望と不安も含んでいる語感をよく感知しなければならないことを感じた。

それは伊集の新垣トミさんも同じだが、三人の方の特徴と共に欠陥も感じた。今話していることと、日時の違った後のことが、すぐつづいているように話したり、後が前になったりするうらみがあるが、話される事実は、特記に値することが多い。部分的には、三人共揃って方言の話し方が巧い。話の前後関係も、わたしは自分の主観で整理することは、多少でも事実をそこなうのを惧れて、それを避けて註で解明することにした。

字和宇慶には、他では見られない変った話が出た。本論の談話には記録されてないので、ここで記録することにする。それは戸籍の問題だが、戸籍を新しく作成するに際して、当時の責任者が、戦争による犠牲者で、老人と幼児について珍奇な取扱いがされているとのことである。六、七十歳以上の老人の戦争犠牲者は、事実より二、三年前、四、五年前に死亡したことにし、四、五歳以下の幼児は、全然戸籍に載せてないそうである。つまり幼児たちは生れなかったことにしてあるそうで、そのことについて、現在も当時の責任者が苦情を言われているそうである。これから事実に即して正して行くのは、至難なことだろうが、戸籍がそのまま虚偽で通すのもどういうものだろうか。これも戦争による一つの特異なことである。

和宇慶座談会では、北浜、南浜、津覇も参加して貰うはずであったが、集まって貰えなかったのは残念だったが、談話の長さは、一